第2部　各分野での震災後の取り組み
第6章　公的な支援体制

神田より子

1　消防団

はじめに

東日本大震災では、消防団の方々は自分たちが被災者であるにもかかわらず、地域の皆様のために命がけで救助、捜索、消火、避難誘導、自衛隊や広域消防隊の道案内などを行ってきた。その活躍には頭が下がる思いであるが、なぜそこまでできるのか、という疑問が頭から離れない。筆者がそのことを理解するためにも消防団員の方々の体験を伺いたかった。

(1)　消防団員の3・11

宮古地区管内の消防団の活動状況は宮古消防署によると、3月11日の出動人員は710人、12日が797人、13日が730人で、3月20日までは400人体制で活動をしていた。21日以降は300人台で、24日以降になると200人台となり、27日以降は100人台と減少し、4月1日以降になってようやく100人未満となった。

震災直後の活動内容は水門閉鎖、警戒活動、避難誘導活動、消火活動、捜索活動であった。12日以降は水門閉鎖に代わってがれき撤去の活動が加わる。消火活動は16日までとなっている。

宮古市消防対策課が作成した宮古市消防団員用の「地震災害活動マニュアル」には、1初動措置、2参集準備・手段・経路における情報収集、3参集場所、4情報収集・伝達、5住民への広報、6部隊編成・出動準備、7消火活動、8水ひ門閉鎖活動、9救出・避難活動、10無線通信等が掲載されている。

このうち第8の水ひ門閉鎖活動の中で、平成24年度から以下のようにアンダーラインを引いたうえで改正施行が追加されている。

1活動原則　すべての活動団員は、救命胴衣を必ず着用する。

2活動要領　出動隊は、津波予想到達時刻等の情報把握に努め、津波予想到達時刻10分前には予め分団で定めた避難場所に、必ず避難が完了していること。

今回の震災に関する消防団の動向について、2015年8月29日に宮古市消防団本部宛にいくつかの質問をさせていただき、9月2日に**白鳥定良宮古消防署長**（昭和32年生）から直接お答えを頂いた。以下はその内容である。

①消防団の規約が3・11以前と以後でどのように変わったのかについて伺った。

3・11以前は明確なものはなく、津波到達時刻の前までには避難し終わっている、というものだった。しかし3・11以後は、大事なことは津波が来る前に自分の命を守れ、率先して避難者たれという事で、3・11以降のすべての消防団員に周知し、「消防団地震災害活動マニュアル」を定め、活動内容を徹底した。

②宮古市管轄消防団員の被災状況（死亡者、負傷者、家（家族）、職場など）を伺った。

死者・行方不明者あわせて16名の殉職者と6名の負傷者という。約1千300人分の家族や家の状況は把握していないとのことだった。

③次は被災した消防団員への補償について伺った。

補償は全国一律で、特別賞じゅつ金が国、県、市からでる。その他弔慰金、遺族援護金として日本消防協会から福祉共済金がでる。また遺族補償年金が出て、一時金か分割金かを選ぶことができる。

消防団員の出動手当と、3・11の出動への手当だが、出動手当は1回当たり2千円で、災害法適用や8時間を超えると倍額を出す。

④3・11以前と以後で消防団員の数に変化があったのかを伺った。

団員の数の変化は以下の通りだった。平成22年10月1日現在では1千315人、23年は1千300人、24年は1千286人、25年は1千258人、26年は1千244人となっている。微減という感じだが、人口比を考えると減少はしていないという。

こうしたことを踏まえ、以下では各地の消防団員の3・11を追ってゆくことにしたい。

(2) 各地区での消防団員の活躍

田老での活動①

畠山昌彦さん（昭和42年生、館が森、田老漁協指導課長、消防団第三十分団員）に2013年3月28日に話を伺った。

3月11日

震災当日は漁協2階にある事務所にいた。地震直後、事務所に残っていた職員で手分けして防潮堤の外にある施設に人が残っていないか確認を行った。事務所に残っていた女性職員には車で高台にある道の駅まで避難するよう話し、沖の船には無線で連絡しようとしたがすぐに停電になり、連絡をすることができなかった。

停電で全く情報が入ってこなくなったため、1階の購買店舗にあったラジカセに乾電池を入れてラジオをつけると津波の予想は3㍍ということで、防潮堤の内側は問題ないと考えた。しかし、その後予想が6㍍となり、やがて「釜石には大きな津波が押し寄せています」という絶叫が聞こえた。それから英語やら中国語やら意味不明の外国語になって状況が解らなくなった。

3階に上がって漁港を見ると港内の海水が渦を巻いて引いていき、大型の漁船が次々と転覆していくのが見えた。一緒に事務所に残った参事から周囲の状況を写真におさめておくよう指示があったので、カメラを持って漁協のすぐ前にある防潮堤の上に登ると田老港の沖にある防波堤の遙か上に水しぶきが見えた。それは南岸低気圧の影響で10㍍の大シケになったときよりも遙かに高い位置で、津波が6㍍どころではないと直感し、すぐに防潮堤を駆け下りた。防潮堤で水門を監視していた三十分団の団員も私とほぼ同じタイミングで走り出した。

防潮堤を駆け下りている途中、事務所の前に金融部門の職員がいるのが見えたが、防潮堤が目隠しになって津波が来ていることが解らないらしく、避難するそぶりもなかったので「逃げろ！」と怒鳴ったら、状況を察したらしく、すぐに西の方へ逃げ出した。

逃げ出した三十分団の分団員は西の方に逃げた団員と北の方に逃げた団員がいた。西の方が山に近いが、北の方が海からの距離が遠くなる。各人が一瞬の判断で逃げる方向を決めたものと思われる。

津波は内側の防潮堤に一旦阻まれ、波が南北に分かれて山にぶつかり、南北から波が流入してきたため、波が来るのは中央部が最も遅かったことから、北に逃げた団員は亡くなり、西に逃げた団員は助かった。

私は金融部門の職員の後を追って西の方に走ったが、走っている途中で事務所にまだ参事がいることを思い出して立ち止まった。どうしようかと躊躇しているうちに時間は経過していき、山に走っても間に合わないような気がした。以前テレビで見た津波の映像が思い出された。鉄筋コンクリートの建物は津波でも倒れなかったはずだ。時間がたってしまったので、山に向かうより鉄筋コンクリート製の漁協事務所の方が安全だと判断した。3階に上がると津波は今にも内側の防潮堤を越えそうな高さまで迫っていた。このまま持ちこたえてくれるかと思ったが、沖から更に高い波が押し寄せてあっという間に防潮堤を越えて津波が侵入してきた。このとき手にカメラを持ったままだったことに気づいて写真を撮った。

窓は南の方向を向いており、防潮堤沿いに土煙が高々と舞い上がるのが見えた。防潮堤の外側にあった2階建ての大きな建物が防潮堤の上に持ち上げられるのが見え、たくさんのガレキと共に黒い波が防潮堤の内側になだれ込んできた。

北からも南からも家が次々とドミノ倒しのように倒れて中央部に集まり、事務所の周囲はあっという間に真っ黒な水に被われた。たくさんのプロパンガスのボンベが浮いてきた。シューシューとガスを吹き出すものもあった。

周囲の山々から黒煙が立ち上ってきたと思ったら、火が見えた。流された家から山の木に火が点き、次々と延焼し始めたが、何の対処もできなかった。

家は流失したが幸いにも家族は全員無事だったので、両親に子供を

預けて消防団の活動へ参加した。周囲の山の火災で避難場所の一つとなっていた中学校も危険と思われたため、中学校にいたけが人を総合事務所まで担架で運んだ。けが人のおばあさんは動かすと痛がり、このまま置いていってくれと言ったが、無視して運んだ。優しい言葉の一つでもかけてやれば良かったと今では思うが、火がすぐそばまで迫っていて、言葉をかける余裕すら無かった。

その後、公民館へ行ってヤカン・ヨガマット、小学校の裏にある緊急時の備蓄品倉庫から、毛布・断熱シート・懐中電灯などを持ち出して被災者へ配った。避難所の床は堅くて冷たかったのでヨガマットは重宝がられた。

被災地は真っ暗で歩ける状態では無かったため、明るくなるまで被災者の捜索はできなかった。

3月中の活動

翌日から避難者の捜索に入ったが、被災場所はありとあらゆる場所からクギとかガラス片が飛び出しており、長靴と軍手しかない消防団員はあっという間に手足がキズだらけになり、破傷風に気をつけろと言われた。一緒に捜索した自衛隊の人達の靴はクギを踏んでも平気そうだったし、クギやガラスに触ってもキズがつかないようだった。水筒や行動食も持っていて羨ましかった。

不明者の捜索と山火事の消火。どちらもやらなくてはならないのだが、人が少なくどちらも中途半端になってしまい、捜索中に「今頃探したって生きてる訳がない。今まで何をやってたんだ」と罵声を浴びせられた。家を失って心細いはずの家族をほったらかしにして、食うや食わずで火事場と被災地を這いつくばってきたのに、なぜこんなことを言われなければならないのかと情けなくなった。このことが一番辛かった。私たちはどうすれば良かったというのだろうか。今でも解らない。

仲間の分団員は両親の消息が知れないのに、ずっと消防団活動を続けていて「ご両親を探しに行け」と言っても聞かなかった。彼には両親が亡くなっているかも知れないという予感めいたものがあって、何も考えられなくなるぐらい動き続けることで不安を払拭していたのだと思う。

田老での活動②

館　昭一さん（昭和33年生、保険代理店経営、田老消防団二十八分団長）に２０１３年12月23日に話を伺った。

家は田老の川向だった。高校は釜石で、その後東京の関東化学に就職し、昭和58年に結婚し、実家を継ぐために昭和59年に帰郷した。こちらで就職し、今は保険代理店をやっている。実家は漁師で、今もやっている。

3月11日は営業のため、田老にいて、契約活動をしていた。地震の時は宮古消防署田老分署にいた。この当時は分団の部長で、地震が収まってから屯所に行った。警報が出て現地集合とし、長靴、無線機、刺し子半纏を着て、ヘルメットをかぶり、屯所から１００㍍ばかり離れた防波堤の上に行き、水門を閉めに走った分団員の確認に声かけをし、帰ってきた声で誰が来ているか判断した。3時に水門閉鎖が終了した。そのとき私は防波堤の上にいた。

無線で3時20分に津波到達という情報が入った。このときの海の様子が変だった。老人たちからは田老は津波が大きくなるので、他より2倍・3倍になると言われていた。3時10分頃に避難した。

亡くなった祖母が「斜面の道路は津波が跳ね上がる」と言っていたが、観光ホテルの裏の道でそれを実感した。「足下に水を感じたら真上に上がれ」と言われていた。赤沼山に逃げたときは、水位が3㍍くらいに上がっていた様に思う。サッパ船が渦の中で廻っていた。その後定置網の鮭漁に使うダンベ船が流れ出した。昔の人が「ヨダ」と言っていたものだと思った。ダンベが流れるには4・5㍍の水深に達している必要があるので、見ているとこれが津波だと思った。

元分団長が「佐賀部」を見ろと言った。これは田老湾の南側の岩が並ぶ岬で、そこに波が丸くなるように押し寄せていた。一方、北側の

三王岩方向でも同じように波が高くなり、両方の波が一つになって盛り上がり目線が水平線より上になり、一端止まった。すると跳ね上がった様に見えた波頭がコバルトブルーになり、そのまま蛇がうねるようにガーッと吹き上がって来た。これは大変だと思い、山に避難していた皆に墓地に移動するように大声を出した。

その後山の中を走り、墓地につながる道まで出て、中学校まで波が来ているのを見た。校庭内に救急車があり、回転灯が消えて水に浸かっていた。街中の家々が潰れ、ほこりと水しぶきでよく見えなかった。

中学校までは津波が上がらないと思っていたが、校庭まで家が流されて飛んできた。学校の前の家が校庭にそのまま打ち上げられていた。

このあたりの家は観光ホテル側から回って来た波に呑まれた。球場側の家は波に打たれたように崩壊していった。津波は防潮林を根元から倒して、波が家に当たった瞬間になぎ倒してゆく。波の力が強すぎて全壊になった。旧防波堤の内側の家は2階が残っていた。

自分の家は水圧で2階の洋服ダンスが瓦礫の上にポンと乗っていた。家族6人は全員無事だった。何かあったら、山のてっぺんの墓地に集まれと言っていた。落ち着いてそちらに行こうとしたら、中学生と老人が山の中腹に見えた。中学生に男は老人たちを引き上げ、女は物を運べと声をかけ避難させて、彼らを上の方に連れて行った。その後墓地に行ったら、家族が皆集まっていた。

二十八分団の24人は全員無事だった。津波直後に活動できたのは20人だった。町内で職場にいた者はその近くの水門などで活躍していた。分団員で家が残ったのは3人だけだった。他は家がなくなり、総合事務所に全員が集まり合宿状態だった。3階の2部屋を占領し、皆で泊まった。食べ物もなかったが、空腹感はなく、そのまま疲れて寝て、朝5時頃から活動をした。生き残った人たちを脱出させることが先決だった。朝の内に7人くらい助けた。声かけをして、生きている人をここへ連れてきた。

その日の昼頃、神田地区からおにぎりが来た。北高の厨房で作ったという。三十三分団の人たちが「出せ出せ」と言って米を供出してくれた。最初は塩がほしい、次はのり、梅干し、漬け物とどんどん贅沢を言いたくなった。この食事は自衛隊が来るまで続いた。

翌日には自衛隊の調査部隊が入ってきて、13日には活動していた。田中分団長は盛岡に行っていたが、夜には帰り、皆の活動の記録をつけていた。

11日の夜に山火事が発生して、12日の午後から13日にかけて消火活動をした。鹿角の消防隊が入って来てくれた。山田や大槌の火事や被害がひどかったので、こちらにはヘリコプターは来てくれなかった。山火事は4日間続き、種火が残っているところを消して歩いた。小学校からポンプで水を引き、ホースをつないで消火した。小型ポンプも使った。ジェットシューターという消化器を背中に背負い、手でポンプを押して消した。この器具は本来残火処理用のものだが、他に何も道具がなく、これを使った。火事があったところに黙って立っていると足下が熱くなり、消えたと思ってもまたボッと火が点いた。山火事は飛び火で中学校あたりまで来た。一昼夜以上燃え続けていた。津波で車ごと運ばれ、水死していた人が、その後の山火事でさらに焼かれた人がいた。

二十八分団の管轄管内は館が森から川向までの防波堤の内側になる。道路と川で区切った区域がその範囲で、カマド町といい、分家に出た人たちが集まって住んでいた地区だった。軒数は３００軒くらいで、同級生は１００人くらいいた。

緊急作業は3月末までで、4月からグリーンピアに移り、二十八分団として昼は田老まで降りて活動をした。この活動は5月連休後頃まで続いた。4月、5月は見回って瓦礫の処分、行方不明者の人探し、撤去する家の手伝いなどをした。誰の家かわからないものもあって、なかなか進まない。合宿状態だったので、仕事はしやすかった。分団は屯所から歩いて来られる範囲なので、日頃からよく一緒に飲んでいて、お互いに気心がわかっている。

私は4月末から仕事に復帰した。佐原に親戚がいて、電気が通ったらすぐにここの避難所からそこに移った。父母はそこにいて、家族は

宮古二中の仮設にいた。自宅は平成25年9月にローソンの裏に新築した。土地は父が買っておいた場所になる。隣の人に聞くと水は入らなかったというので、土地を道路から50㌢高くして、基礎も50㌢上げて建てた。親戚の山を崩して建てようかと思ったが、造成に金がかかりすぎるので、苦渋の決断をした。

息子は宮古消防署の消防士をしている。当時は岩泉に勤めていた。自宅にいたので45号を通って勤務先に向かおうとしたが、小本で止められた。これから消防署に行くと言って通してもらったという。山道を回って岩泉に行く道を知らなかったのだ。彼は今年結婚してアパートにいる。

津波の時は、分団員の活動は10分以内に終えて、15分以内に避難すると決めていた。この15分というのは昔からの言い伝えにあった。地震があって、津波が来るまでに三陸沖まで15分はかかると計算していたのだ。堤防があるために大丈夫だと考えていた人がいたが、分団では津波シミュレーションを見て、防波堤を越えることは想定していた。しかしこの大きさの津波は想定していなかった。

今思うととんでもないものが来たと思う。一人住まいの老人をチェックすると言っても、そんな余裕はない。逃げない人を連れ出す強制力はもたない。

最初の情報が3㍍だったので、それが足かせになっていた。堤防の上にいて、波を見に行った人がいたが、分団員を避難させるためにかまっていれなかった。「津波てんでんこ」ということは頭にあった。分団員がそばにいるという安心感はあった。震災前は「消防団は飲んでバリいる」と言われていたが、その後は言われなくなった。

反省点

今後のことと反省点として、まず始めに水門を閉める。無線が切れたときの啓蒙活動ができなかったこと。広報をどうするか、やるべきだがどうすれば良いのかなどを上げることができる。我々には交通をストップさせる根拠がない。この先は危ないと言っても権限がない。

山田町では止めて助かった人がいたと聞いた。津波が来ているのに車がどんどん走っていて、頭がおかしくなりそうだった。見ていてパニックになる。個々の意識を高める必要がある。津波の際に誰が車を止めるのか、と言う話は前からあった。啓蒙はするが、個々の人がそれに従うという意識がない。危ないから行くなと言っているのに、それに従わない。震災後、国道事務所や警察署で話し合いをして、ここで止めるという話はできている。

水門は遠隔操作で動けばよいがうまく作動しない。新しい水門は4か所できる予定だ。元は18か所あり、これらはすべて使えないし、1回では閉めきれない。14・7㍍の防波堤が新しくできるが、この高さでも今回の津波は防げない。

崎山地区での活動①

崎山では消防団第十六分団長の**山下啓一さん**（1952年生、崎鍬ヶ崎在住）から2015年4月25日に米屋陽一が話を伺った。

地震後すぐに水門を閉めに行き、防潮堤に上がって様子を見ていた。すると副分団長の山崎安人君（1962年生）が「無線で高台に上がれという指示があった」という。そこで高台に上がってすぐに波が来て、危機一髪で助かった。分団員のK君は車に乗ったまま流されたが、車が途中で引っかかって助かった。

副分団長の山崎安人さんの話によると、啓一さんの娘さんとその友だち、おかあさんの3人が家ごと流されたという。安人さんは大沢に最初に行き、水ひ門を閉鎖後、各海岸を廻った。

その後、屯所が無事だったから、先ず屯所に皆集まり、今後のことを話し合った。十六分団は管轄区域に6か所の海岸があり、分団員が分かれて避難誘導をした。2日目も3日目も行方不明者の捜索に参加した。啓一さんは自分の身内にも不明者がいたが、そちらは我慢をして、他の地区を優先した。

家族を亡くしても部落のことはしなければならないという頭があった。息子には無線連絡して「悪かったな」って言った。息子からは「消

防、全うしたらいい」と言われた。家族に悪かったなあと思う。

1年過ぎてあきらめはついたが、もしかしてどこかに生きていてくれればなあという気持ちがある。

崎山地区での活動②

消防団第十六分団**佐々木重勝さん**（1948年生、崎山在住、箱石自治会長、宮古市議）から2015年3月13日に米屋陽一が話を伺った。

私もいろいろな立場がありましたが、私自身も消防団を優先して、自治会の対応は嫁さんが背負い駕籠をしょって、避難所に食べ物とか毛布とか届けた。十六分団は団長の指揮のもとに田老とか津軽石とか各地の分団の必要なものを聞きながらやった。

田老の方面隊からは全く情報が得られず、通信手段もなく、連絡もやれなかった。身内もいることで気になり、行きました。トンネルを抜けて見えた田老の光景はすごかった。地区全体が瓦礫の山で、唯一歩ける防潮堤に沿って歩いたが、それも途中で破壊されていた。四つん這いになって進んだが、そこは建物の基礎だけが残されていた。近くの小高い山の上の神社から人の声が聞こえ、行くと怪我人がいて、治療が必要だった。そのため瓦礫の中を総合事務所に向かったが、たどり着けず、線路沿いに歩き、自衛隊本部にたどり着き、お願いすることができた。

被災当初は停電しているため、暗い家に帰り、翌日も暗い中を出かけるという状態だった。

捜索当初は、生存者確認が優先され、その後に行方不明者の捜索活動を行った。当初消防団には発見の段階で「手を付けず、警察に連絡をしてください」ということだったが、捜索が進むにつれて、搬送まで依頼された。消防団員の負担も大きかったものと思う。

宮古地区での活動

2014年11月20日に第八分団の**太田憲一郎さん**（1946年生）、**和山悟さん**（1971年生、分団班長）、**黒渕祐司さん**（1980年生、分団員）から杉本栄子が伺った。第八分団の管轄区域は末広町、大通3丁目と4丁目、南町である。

水門監視から津波到達後まで

太田さんによると、地震の後、第八分団が8人で水門を監視していたとき、3番目の真っ黒い波がバッーと来た。そこで号令をかけて土手にいた団員たちが下に避難した。太田さんが数分後、線路に上がってみたら、鉄橋がなくなっていた。

黒渕さんたちは分団長の「逃げろ」の声で2、3人がポンプ車に乗って、管内を廻った。土手沿いの距離を走っている間に、サッパ船が土手に上がったのが見えたのを横に見ながら、波を被りながら走った。和山さんは土手沿いに走り最初の角を曲がるまでが生きるか死ぬかという異常な緊張だったが、角を抜けてから冷静になった。南町まで波が来たということは大通全部に波がきていると思った。橋も渋滞で通れなかったが、避けて、避けて、警察官に「南町の堤防も水が上がっているから避難させてくれ」とマイクでしゃべり、末広町に下ったが、末広町にはまだ水がきていなかった。

黒渕さんによると、まだ人がいた。店の心配もあるから、何人か外にいた。

和山さんは、必死で「堤防を越えた、逃げろ！」ってマイクで言った。太田さんの奥さんも絶叫型の「逃げろ！逃げろ！」というのを聞いている。みんな「えっ！」っていう顔をしてこっちを見て「なにをいっているんだ、お前たちは」みたいな。必死だったのでその人たちが避難したかどうかは覚えていない。すごい勢いで避難して行ったのは、南町を走っていた間だった。オートバックスに突き当たる辺りで、そこの整備士さんたちが全速力でダッシュしているから、そこら辺にいた人たちがみんなそれにつられて八幡さまに向かって走って行った。後日宮司さんに聞いたら結構な人数が八幡さまに避難してきたという。「堤防越えた、逃げろ！」って言ったら、みんな本気で逃げだした。

駅前のロータリーのカリヤビルと三上酒屋の前に、腰を抜かして立てなくなっているお年寄りが何人かいた。その人たちをポンプ車に乗

せて消防署まで行った。ところが、消防署が状況をまったく把握していなくて…。

黒渕さんによると、多分津波がきたときに、もう無線が切れていたと思う。

和山さんのポンプ車を見た瞬間、消防署員がふっ飛んできて、「状況がわからないので、2階に来て教えてくれ」と言われた。第八分団が来たということは、なにかが起こって、見てきたっていうのがあったのだ。

その後、ポンプに乗せた人たちを避難所の宮古小学校に連れて行った。「ここまでくれば大丈夫、避難所ですから」って降ろそうとしたが、そこに津波が来ていた。校庭まで水が上がってきているのに、「ここまでくれば安心だ、よかったね」と、のろのろ歩いている人がいっぱいいて、祐司君が「だめだ、走れ」って、マイクでしゃべった。

和山さんはその後、向かい側の県の合同庁舎に行き、「腰の抜けて立てないお年寄りがいるから中に収容してくれないか、宮古小学校にも津波が来ているから」と言って、会議室を開放してもらった。そこで岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれた。我々は人を降ろしてから第一病院の角に行った。

その後、魚菜市場駐車場の角で完全に道をふさぐようにポンプ車を止めて、アナウンスを続けた。水が来ていてこの先は行けないからと、車を止めて「ここから先は波が来ているから」と引き返すように伝えた。その後、駅前通りに戻った。かつてここは防災計画を聞いた時に、市内で駅前通りが一番高い土地だと記憶していた。ここなら大丈夫だろう、もしここが被ったら市内は全滅だろうという判断だった。だから、駅前通りから声が聞こえてくれば、付近にいた人はここに寄ってくるだろうという頭があった。それで、「この通りを通って避難しろ」と、案内を続けた。

水が引き始めてから

2人はとりあえず安定したのと水が引き始めるのを見て、再び駅前に戻り、ポンプ車は駅に止めて、第八分団の屯所まで歩いて行った。

太田さんは屯所に戻ろうとしたら、べにやの3階から「あそこさ、人がいる！」っていうので団員が助けに行って、その晩は屯所の2階に泊めました。

和山さんによると、夜水が引くまでの間、結構な人数が自宅に帰ろうとしていた。田老、向町、藤原の人たちはいつもの習慣で市役所の前を行こうとしていた。あまりにも人数が多いので、花の木通り、末広館のあたりに分団員が交代で1人立って、「ここから先は朝になってから行ってくれ」という説得を繰り返した。結構な数の人が血相変えて「田老まで行けますか」「藤原まで行きたいんです」「金浜が全滅って聞いたんですけど」って、聞いてくる。市内ではなくて遠くに自宅のある人が、ここから帰ろうとしていた。

その時点ではどこが詰まってどこが空いているのか、当然わからないし、すでに夜ですから、「頼むから避難所で一晩耐えてくれ」としか言いようがなかった。

黒渕さんによると、水が引くのに合わせてだいぶ遅くなってから、動ける者が歩いて見て回った。

和山さんによると、水が引いてからポンプ車も出したが、セントラルホテル熊安の前に、白い大きな漁船が止まっていたので、その先は車が入れない、そこまでが限界だった。その漁船がポンプ車で末広町に入った時に見た船だった。

太田さんによると、アパートに住んでいるお年寄が、ベッドに寝ていてワッーと水を被り、水が引くのを待っていた。若い人に助けられて、衣類が濡れたので裸でおぶさって出て来た。もう1人階段から降ろした人と2人をポンプ車で宮古病院まで運んだ。

黒渕さんは、ポンプ車が生きていたお蔭で、その後の火事にも役に立ててよかったという。太田さんも、おじいちゃんがお一人亡くなられたが、管内を守ることができてほっとしているという。

高浜地区①

消防団十一分団長の**佐々木好栄さん**に、平成26年8月12日に宮坂清が分団屯所で話を伺った。

3月11日の地震発生時には高浜小学校に全学年児童がまだ在校しており、全員が校庭に避難した。小学校は地域の避難所に指定されており、多くの乗用車が入っていた。「連れて帰っても良いですか」との保護者の声に、「警報が出ているのでもう少し様子を見ましょう」と、大洞晴弘校長が止めた。そのうち校庭にも津波が押し寄せて来て、消防団員の「だめだあ、みんなあ、逃げろ、こっちだ、早く、早く」の一声で、全員が校庭裏の高台に逃げて、全員無事だった。

この日、消防団十一分団長の佐々木好栄氏は、避難場所に指定されていた高浜のコープケミカル社宅の裏にある高台に避難した。ここには67、8人が避難しており、自主防災の倉庫や集会所もあったが、鍵がなく、社宅の集会所の1部屋を借りて、お年寄り19人に入ってもらった。また倉庫に6人、資材置き場に17人が入り、屋外にあふれた26人はたき火をして過ごした。社宅の人から食糧を運んでもらい、自宅も近かったので米を持ち寄り、皆で食べた。中に津波の水を被って低体温症になった子どもがおり、母親と団員が3人で往復5時間かけて河南中学まで運び、救急車を呼んで助かった。

12日からコープケミカル社宅上の避難所にいた消防団員4、5人で水門を開け、また完全に孤立していた高浜への道を確保するため、重機で道路の瓦礫を取り除いた。13日には国道45号線が開通し、14日から自衛隊が来てくれて、行方不明者の捜索を行った。捜索などで家を壊さなくてはならない際には、家の持ち主への了解の取り付けも依頼されたが、抵抗のある人もおり、辛かった。

分団長として毎日出なければならなかったが、消防団の半纏を見ると安心するという人もいて頑張った。

高浜地区②

高浜の**安倍主税さん**（昭和30年生、当時宮古市消防団第二分団副分団長、「異人館」マスター）から宮坂清が２０１４年８月12日に話を伺った。

地震があったときは宮古の街にいて、すぐに閉伊川の水門を閉めに行った。着いたときはすでに他の団員が閉めていたが、大きな津波が来るという感じではなかった。それから閉伊川の水が引いて底が見え、それから黒い水が来た。分団長を先に防潮堤から降ろし、自分も飛び降りた。そうしたら水が頭からざーっと降ってきて、発泡スチロールの箱につかまって流されていった。３００㍍くらい沈むことなく流されて、瓦礫の上に這い上がった。岸まで１００㍍くらいあり、立っている体力が残っていなかった。その後無線で連絡が付き、消防署のアルミのボートが来て、助けられた。山口小学校に行ったが、濡れたままだったので、近くの姉の家に行き、一晩過ごした。

翌日自分の家のある「異人館」を見て、十一分団のある金浜、高浜の行方不明者の捜索活動に加わった。

津軽石での活動①

中野規男さん（津軽石本町、宮古市消防団第二十分団分団長）から宮坂清が話を伺った。

地震発生時、家にいた私はすぐに車で屯所に向かい、すでに待機していた分団員2人と津軽石川水門を閉鎖するため遠隔制御所へ向かった。他の団員は3か所ある他の水門の閉鎖に向かわせた。しかし停電のため作動せず、水門の建屋へいって操作するしかないとポンプ車に乗って水門閉鎖に向かった。操作方法がわからなかったが、どうにかすべてを閉鎖することができた。しかしすでに高浜付近で水飛沫（しぶき）が上がるのを見て、高台への避難は間に合わないと判断し、建屋に避難した。水門の高さは8・5㍍だが、さらにその上2・5㍍くらいまで水が入った。

津波が収まった15時50分頃、水門を開放してたまった水を排出させようと試みた。しかし巻き上げ機が作動しない。1号建屋に動力用発電機を見つけ、これを作動させることができた。我々消防団は発電機が動力用であることも巻き上げ機があることも聞かされていなかった。

他の分団員に津軽石地区や学校の避難所の状況確認と安全確認に行かせた。

翌12日からは生存者救出のための活動をした。避難所から捜索に向かい、また避難所に帰る日々で、避難所と自衛隊をつなぐ役割も果たした。

津軽石での活動②

佐々木睦雄さん（津軽石新町、宮古市消防団第二十一分団分団長）から宮坂清が話を伺った。

水門閉鎖の後、避難誘導と救助を行った。栄通りでは津波の翌日まで自宅に閉じ込められていた人が多数おり、ゴムボートで13人を救助した。

分団員の館下光利さんは、当日は避難誘導をしたり、ボートで救助活動を行い、夜は車両火災のために出動した。翌日からは遺体捜索を行ったが、その光景は今でも思い出してつらい。屯所でずっと寝泊まりしていたので、うまく眠れなかった。

津軽石での活動③

長澤光彦さん（津軽石祓川、宮古市消防団第二十三分団副分団長）から宮坂清が話を伺った。

二十三分団はあまり被害がなかったので、分団員の旬さんたちに屯所でおにぎりを作ってもらい、避難している人たちに届けた。

翌日以降は赤前で自衛隊員と遺体捜索を行った。泥棒が出没していたが、夜警をすることができなかった。

(3) 消防団員としての動きのまとめ

以下ではこれまで見てきた消防団員の皆様の震災の最中での活動状況をまとめてみたい。

田老の畠山昌彦さんは地震直後から動きだし、防潮堤の外に人が残っていないか確認した。こうした災害後すぐに行動に移せるのは、漁協指導課長という立場と共に、消防団員としての役目が身についていたからであろう。停電後も購買店舗のラジカセですぐに情報収集をし、当初3メートルの予想が6メートルとなった事態を把握している。

その後港内の海水が渦を巻いて引いていき、大型の漁船が次々と転覆していく様子、また田老港の沖にある防波堤の遙か上に水しぶきを見て、南岸低気圧の影響で10メートルの大シケになったときよりも遙かに高い位置で、異常事態を直感し、防潮堤にいた人々に「逃げろ！」と怒鳴って避難を促した。

津波が落ち着くと、家族の無事を確認し、消防団の活動へ参加した。周囲の山の火災で避難場所となっていた中学校にいたけが人を総合事務所まで担架で運んだ。小学校裏の緊急時の備蓄品倉庫から、毛布・断熱シート・懐中電灯などを持ち出して被災者へ配った。

翌日から不明者の捜索と山火事の消火をおこなった。しかし捜索中に「今頃探したって生きてる訳がない。今まで何をやってたんだ」と罵声を浴びせられた。また仲間の分団員は両親の消息が知れないのに、ずっと消防団活動を続けていた。

田老の館昭一さんは地震の時は宮古消防署田老分署にいた。すぐに屯所から出動し、地震が収まると分団員の確認をし、3時に水門閉鎖が終了した。そのとき防波堤の上にいて、無線で3時20分に津波到達という情報が入った。このときの海の様子が変だった。田老湾内ではサッパ船が渦の中で廻り、定置網の鮭漁に使うダンベ舟が流れ出した。田老湾の南側と北側の岩を超えた両方の波が1つになり、うねるように吹き上がって来た。これは大変だと山に避難していた人々に墓地に移動するように大声を出した。途中中学生と老人が山の中腹に見えたので、老人たちを引き上げ、物を運べと声をかけ、上に連れて行った。

二十八分団の24人は全員無事で、津波直後に活動できたのは20人だった。彼らは近くの水門などで活躍していた。3人を残してみな家がなくなり、総合事務所に皆で泊まった。

翌日は朝5時頃から活動をした。生き残った人たちを脱出させることが先決だった。朝の内に7人くらい助けた。その日の昼頃、神田地

区からおにぎりが来た。三十三分団の人たちが「出せ出せ」と言って米を供出してくれたのだ。

11日の夜に山火事が発生して、翌日から消火活動をした。山火事は一昼夜以上燃え続けていた。

緊急作業は3月末までで、4月からグリーンピアに移り、二十八分団として昼は田老まで降りて5月連休後頃まで続いた。4月、5月は瓦礫の処分、行方不明者の人探し、撤去する家の手伝いなどをして、4月末から仕事に復帰した。

津波の時は、分団員の活動は10分以内に終えて、15分以内に避難すると決めていた。分団では津波シミュレーションをしていて、防波堤を越えることは想定していたが、この大きさの津波は想定していなかった。

一人住まいの老人をチェックする余裕はない。逃げない人を連れ出す強制力はもたない。最初の情報が3㍍だったので、それが足かせになっていた。

反省点として、まず始めに水門を閉める。無線が切れたときの啓蒙活動ができなかったこと。我々には交通をストップさせる根拠がない。この先は危ないと言っても権限がない。震災後、国道事務所や警察署で話し合いをして、ここで止めるという話はできている。

水門は遠隔操作で動けばよいがうまく作動しない。新しい水門は4か所できる予定だ。元は18か所あり、これらはすべて使えないし、1回では閉めきれない。14・7㍍の防波堤が新しくできるが、この高さでも今回の津波は防げない。

崎山の山下啓一さんは、地震後すぐに水門を閉めに行き、防潮堤で様子を見ていた。「無線で高台に上がれと指示があった」ので、高台に上がるとすぐに波が来て、危機一髪で助かった。分団員のK君は車のまま流されたが、車が途中で引っかかって助かった。

啓一さんは親族の方など3人を亡くされたが、行方不明者の捜索を優先した。息子からは「消防、全うしたら良い」と言われた。

山崎安人さんは水門を閉鎖後、各海岸を廻った後、屯所に皆集まった。十六分団の管轄区域ある6か所の海岸で分団員が分かれて避難誘導をした。2日目も3日目も行方不明者の捜索に参加した。

崎山の佐々木重勝さんは地区の自治会長も兼ねていたが、消防団を優先し、自治会の対応は奥様が担った。十六分団は田老や津軽石などの分団に必要なものを届けた。田老方面隊の情報が得られず、自分で確かめに行った。山の上の神社には治療が必要なけが人がいて、瓦礫の中を線路沿いに歩き、自衛隊本部にお願いできた。

被災当初は生存者確認が優先され、その後に行方不明者の捜索活動を行った。当初消防団には発見の段階で「手を付けず、警察に連絡を」ということだったが、結局搬送まで依頼され、消防団員の負担も大きかった。

宮古市内の太田憲一郎さん、和田悟さん、黒渕祐司さんたちの体験もすさまじかった。太田さんによると、地震後、水門監視の最中に真っ黒い波が来たため、土手にいた団員たちが避難した後、線路に上がると鉄橋がなくなっていた。

黒渕さんたちは分団長の「逃げろ」の声を合図にポンプ車で管内を廻った。サッパ船を横に見ながら、波を被って走った。和山さんは、必死で「堤防を越えた、逃げろ!」と叫んだ。駅前では腰を抜かしたお年寄りたちをポンプ車に乗せた。消防署が状況を把握しておらず「教えてくれ」と言われた。その後、ポンプで老人達を避難所に降ろそうとしたが、そこにも津波が来ていた。その際ものろのろ歩いている人がいっぱいいて、祐司君が「だめだ、走れ」とマイクで叫んだ。県の合同庁舎に行き、老人の保護を依頼すると、岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれた。その後、魚菜市場の角や駅前通で避難や案内を続けた。また、商店に人がいるのを発見し、団員が助けに行って、その晩は屯所に泊めた。

和山さんによると、夜になって多くの人が自宅に帰ろうとしていたため、花の木通り、末広館付近に分団員が交代で立って、朝まで止まるように説得を繰り返した。

太田さんや黒渕さんは、ポンプ車が残っていたので多くの人々を守

ることができてほっとしているという。

高浜では地震発生時には高浜小学校に全学年児童が校庭に避難した。そのうち校庭にも津波が来て、消防団員の「だめだあ、みんなあ、逃げろ、こっちだ、早く、早く」の一声で、全員が校庭裏の高台に逃げて、全員無事だった。

この日、佐々木好栄氏は、高浜のコープケミカル社宅裏の高台に避難した。67、8人の避難者を落ち着かせ、食糧を手配し、津波で低体温症になった子どもを母親と団員が3人で5時間かけて運び、救急車を呼んで助かった。12日から消防団員4、5人で水門を開け、孤立していた高浜への道を確保するため、重機で道路の瓦礫を取り除いた。13日には国道45号線が開通し、14日から自衛隊と共に行方不明者の捜索を行った。捜索で家を壊す際には、家主への了解の取り付けも依頼された。分団長として毎日出たが、消防団の半纏を見ると安心するという人もいて頑張った。

高浜の安倍主税さんは地震のときは宮古にいて、閉伊川の水門を閉めに行ったが、300㍍くらい流された後、ボートに助けられた。濡れたままだったので、姉の家で一晩過ごし、翌日は十一分団のある金浜、高浜の行方不明者の捜索活動に加わった。

津軽石の中野規男さんは地震発生後、すぐに待機していた分団員5人と地域の水門閉鎖に向かったが、停電で作動せず水門の建屋でどうにかすべてを閉鎖したが、すでに高浜付近で水飛沫が上がり、建屋に避難した。水門の高さは8・5㍍だが、その上2・5㍍まで水が入った。津波が収まった頃、水門を開放しようと試みたが作動せず、動力用発電機を見つけて作動。消防団は発電機が動力用であることも巻き上げ機があることも聞かされていなかった。他の分団員に津軽石地区や学校の避難所の状況確認と安全確認に行かせた。翌日からは毎日生存者救出活動と捜索を行い、また避難所と自衛隊をつなぐ役割も果たした。

津軽石の佐々木睦雄さんは水門閉鎖の後、避難誘導と救助を行った。栄通りでは翌日まで閉じ込められていた人が多数おり、ゴムボートで13人を救助した。

分団員の館下光利さんは、当日は避難誘導やボートで救助活動を行い、夜は車両火災のために出動した。翌日からは遺体捜索を行ったが、その光景は今でも思い出すとつらいという。

津軽石の長澤光彦さんは、二十三分団はあまり被害がなかったので、屯所でおにぎりを作ってもらい、避難所に届けた。翌日以降は赤前で自衛隊員と遺体捜索を行った。泥棒が出没していたが、夜警をすることができなかった。

⑷ 消防団員の行動を考えてみる

身体化された行動

これまで見てきたことから、消防団員は、異変があるとすぐに行動ができる。災害があったときにはすぐに現場に駆けつける。地震があると直後に津波を想定して、水門を閉めに行くことができる。言われなくとも危険地帯を巡回して回る。何をおいても災害弱者を救出しようと試みる。仲間たちとの連係プレイが徹底している。

宮古は太平洋に面していることから、海辺や川の安全対策として水門が多く建造されており、緊急時には水門の閉鎖と監視、その後の水門の開放は消防団員の重要な任務と位置づけられているようだ。地震後に津波が想定されると、各地の消防団員が判で押したように誰もがすぐに近くの水門の閉鎖に飛んで行ったのも、訓練のたまものなのだろう。

何人かの消防団員になぜここまでがんばれるのか伺ったところ、「義勇の心」と表現してくれた方がいた。また地域社会の中で皆が顔見知りだから、困っていれば見捨ててはおけない、とも語ってくれた。社会の中での人間関係、そして隣近所との結びつきが色濃く残っているからこそ、こうした行動をとることが可能となるのだろう。

また消防団員が身につけている消防団の半纏に関する言及も多く聞いた。半纏を着ることは、そのまま団員としての誇りをまとっているようにも見えた。また半纏姿の団員を見て安心したという声を住民の方々からよく伺ったし、そうした声を聞いて団員もまた頑張ろうと思

えたという。

自分の家族よりも災害現場での活動を優先する。家族の無事を確認すると、そのまま活動に参加していたのは畠山さんだ。その仲間の団員は両親が行方不明なのに捜索活動を継続していた。考えることを止めて活動に没頭していたのだろうと仲間の1人は推測していた。親族の方など3名を亡くしたのに消防団の活動を優先したのは山下さんだ。息子さんは「消防を全うしたらいい」と言ったという。このときの息子さんの心境はいかばかりだったのか…。また妻に自治会の活動を任せて消防団活動を優先した佐々木さんもいた。さらに自分は津波で流された被災者なのに、翌日から行方不明者の捜索活動に加わったのは安倍さんだった。安倍さんの詳細な話は宮坂が伺っているので、ぜひその話に目を通していただきたい。

一方、地域の方々の次のような厳しい語りがあった。「今頃探しに来たって生きているわけがない。今まで何をやっていたのか」という罵声を浴びたことだ。このことが一番辛かったと語られたが、どうすればよかったのか、今でも解らないという。

今後の問題と危機管理

このような大きな震災を体験して、身も心も疲弊しながら、それでも活動を続けてきたのが消防団員だが、その体験に基づいて次のような反省点が語られた。それは啓蒙活動の大切さと、危険とわかっているのに交通をストップさせる権限がないことへの危機感だ。確かに津波が押し寄せてくる事実には、全く気づかずにどんどん流れてゆく車の群れや、津波を見に行っていた人の姿があった。その姿に声をかけられなかったり、止める権限を持たなかったり、そして遠くから見ていた人たちや、後で映像を見た人にとっては、大変に歯がゆい事態だったに違いない。

津波多発地帯が現場のため、消防団員だけに任せておくのではなく、地域住民も巻き込んでのシミュレーション、情報収集等、震災における危機管理について改めて再認識しておく必要があるのだろう。とくに地域全体に関する危機管理体制の見直しと、それに関する情報の共有は早急に進めるべきだろう。この記録を作成しながら、津軽石の水門の管理体制について目を疑った。最も早く水門閉鎖に向かうことになっている消防団員が、その水門の緊急時の操作方法はおろか、動力用発電機の存在も、巻き上げ機があることも知らされていなかったというのだ。

消防団員は「次も必ず津波は来る」という。このいつか来る「次」に供えて、万全の体制を取ってもらうことを願うのみである。

【参考資料】

宮古市消防対策課作成　宮古市消防団員用「地震災害活動マニュアル」平成24年度改正版

2　消防署

はじめに

ここでは宮古消防署、田老分署、新里分署、川井分署の消防署員からの聞き取りの他、盛岡市、秋田県、名古屋市からの緊急消防援助隊の活動状況も掲載した。地震に続く、津波、そして山林火災など、うち続く災害に対処した消防職員の活動を記録した。加えて消防団、自衛隊との協力関係も語ってもらえた。

⑴　緊急消防援助隊等活動状況

２０１５年３月10日に、宮古市の消防本部から「参考　本部緊急援助要請経過等」という資料を頂いた。これには東日本大震災に際して、時間の経過と共に盛岡消防本部をはじめ横浜市消防局及び秋田県内の各消防本部から応援に駆けつけた緊急消防援助隊等の活動状況や活動人員が記されている。以下では宮古に関係する内容を記載してみたい。さらにこの日は消防本部総務課の**外館義博課長**より、この資料に基づき、詳細な説明も頂いた。以下はその内容である。

1　指揮支援部隊名古屋市消防局（岩手県庁調整本部）
指揮支援隊横浜市消防局　3月12日から3月22日（5名延べ50人）

2　緊急消防援助隊
主な活動場所（宮古市、宮古市田老地区、山田町）
応援隊　秋田県隊　3月12日から4月4日
（発災の翌日の朝5時に隊長が来宮、すぐに対応会議）
1指揮隊　3月12日隊数2、人数7、隊数合計35、隊員数１２９、
2消火部隊（ポンプ）3月12日隊数13、人数62、隊数合計１１４、人数５５８
3救助部隊（救助工作車）3月12日隊数5、人数25、隊数合計75、人数３７５、
4救急部隊　3月12日7（16日隊数14）、人数21（16日人数42）隊数合計２４０、人数７２０
5後方支援（食事、寝る場所など）3月12日隊数15、隊数合計２８３、
3月12日人数36人数合計６０４
1次隊、2次隊は3月12日から、3次隊は3月16日から、4次隊は3月20日から、
5次隊は3月24日から、6次隊は3月28日から、7次隊は4月1日（水）から。
地元では各隊に誘導員として道案内のために1名職員を付けて、現場に向かわせた。

3　消防相互応援協定に基づく応援隊（県内の相互応援協定による）
（主な活動場所　宮古市内）
県内応援　盛岡消防本部（3月11日から4月9日まで）
1指揮隊　3月11日隊数1、人数4、隊数合計20、隊員数68、
2救助部隊（救助工作車）3月11日隊数1、人数5、隊数合計20、人数１００、
3救急部隊　3月11日隊数1、人数3、隊数合計30、人数90
（県内の相互応援協定による）
4後方支援（食事、寝る場所など）3月11日隊数1、人数5、隊数合計30、人数合計１１８
指揮隊、救助部隊は3月30日で撤収し、救助部隊、後方支援隊が4月9日まで活動。
1次隊は3月11日からで、2次隊は3月13日から、3次隊は3月16日から、
4次隊は3月19日から、5次隊は3月22日から、6次隊は3月25日から、
7次隊は3月28日から、8次隊は3月31日から、9次隊は4月3日から、
10次隊は4月6日から。

以下は外舘課長から伺った話である。

震災当日の夕方になっても田老分署をはじめ田老地区との連絡が全く取れないため、状況偵察のためポンプ車で職員2名を田老地区に派遣したが、そこで田老地区の林野火災を確認し、そのまま消火活動に当たった。田老分署は津波で全壊したうえ、車両は3台とも被災したため頼みの綱である消防無線を使うことができなかったものである。

県内応援隊1次隊（盛岡消防本部）は、3月11日、発災当日の夜8時頃に到着した。応援隊は、翌朝から活動を始めたが、地元の地理がわかる宮古出身の隊員を選んでくれていた。沿岸部のすべてが被災したので、櫛の歯作戦で活動を展開した。

発災後、間もなくして、電話回線全てが不通となったため、情報収集に困難をきたした。これについては、110番回線は被害を受けなかったことから、消防本部に詰めた警察官からの情報入手及び市内各地で活動にあたった自衛隊から逐次入る情報等によりできる限り対応した。

また消防本部に集結した消防、自衛隊、警察、岩手県及び宮古市などの関係者は、朝の5時半と夕方の6時半に全体会議を開き、共通認識を持った上で活動方針を決定した。このように関係する機関が一同に会し、情報を共有できたことが全ての活動に功を奏したと思う。活動に当たっては人命救助を最優先とし、隊員の安全管理にも留意した。

傷病者の救急搬送は困難を極めた。主要道路である45号線が通行不能となり、山間部を迂回しなければならず、また積雪もあり、普段の2～3倍の時間をかけての搬送となった。

傷病者は、主に宮古病院へ搬送したが、専門的な治療が必要な患者は防災ヘリコプターや応援隊による救急車で内陸部の病院へも搬送した。

(2) 宮古消防署員の活動

小林一彦さん（昭和30年生、岩泉消防署長、当時宮古消防署長、山田町出身）に2013年8月8日に話を伺った。

今回の災害は体験したことがなかった。最初は津波被害の初期対応を行った。大地震により家屋倒壊による怪我が考えられ、「とりあえず　119番トリアージ」を考慮に入れて、救急係長に通信指令室に入ってもらう。負傷の大小に関係なく救急車を出すと、救急車が不足するので、緊急出動の優先順位を決める。これは救命士の係長に任せる。生命の危険に関わるものが第一で、応急処置で済むものは自分でやってもらう。しかし入ってくると想定した119番は数件でぴたりと止まった。通信網の途絶だったが、そのときには気がつかなかった。

消防団の対応について

水門閉鎖、避難誘導の指示などを出した。これまでにない状況であろうと想定し、消防団に対して、無線でさらに高いところに逃げるように指示をした。後で聞くと団ではこういう指示は今までなかったという。さらに住民を高いところに逃がすための指示をして多くの命が助かった。

指揮本部と自衛隊

日々自衛隊との調整を行った。毎夕自衛隊は翌日の活動の調整を行っていた。自衛隊はその日の活動の報告を受け、翌日の計画を立ててから、私の所に来る。自衛隊の要請で地元の消防団がいた方が動きやすいとのことだった。自衛隊は北海道旭川第二師団4～500名がいた。第二師団は宮古、岩泉、田野畑、久慈に配置され、休む班、活動する班など3班に分けていた。

第二師団とは対面式をやった。隊長は老木に戻り、隊員に指示をした。自衛隊は部隊を5～6の班に編制し、各地域に派遣した。自衛隊の隊長の車は無線機だらけだった。活動地域と時間を決めて、地元の各消防分団と一緒の活動をするように指示をした。最初の仕事は道路の啓開だった。自衛隊は道具、重機も自前で持ってきていた。彼らは臨機応変に対応していた。幕僚長は県の振興局に行って作戦本部を立ち上げた。岩手県の危機管理監は自衛隊の出身だ。調整は消防本部の朝の

会議で行われた。最優先するのは人命優先で活動するということだった。

自衛隊は自己完結型だった。山田には自衛隊の基地がある。彼らの活動は今までに出会ったことのないものだった。指揮命令系統がしっかりしていたので、違和感はなかった。「命を守るのだ」という意識が一致していたのだ。そのために一緒に行動できた。

津波後はボートが足りなかった。津波災害用の機材不足があった。ボートに関しては、広域消防の規定では、水害と河川のみだった。津波は広範囲の活動となるので、もっと用意すべきだったと考える。活動できたボートは24時間フル活動できる1隻のみだった。津波では船外機は使えない。手で水の中を引いて助け出す。ホーバークラフト状のボートは消防にはなかった。8方面隊ある消防団にボートを調達できたのは補助金を使った平成24年度だった。津波が来るであろうとは考えていたが、このような被害は想定外だった。訓練していないものは出せなかった。

緊急消防援助隊

緊急消防援助隊は全国から被災3県に入った。消防長が最高責任者となった。秋田県など3地域からの援助隊だったので活動はしやすかった。盛岡消防本部も県内応援の形で入ってきた。秋田県隊は宮古市内、盛岡隊は盛岡への搬送を受け持ってくれた。秋田県隊では指揮、救助の外に消火は湯沢、救急は秋田などが中心となり、混合チームで動いていた。県外隊の車には地元の者が乗って道案内をした。うまく機能したのは全国の消防職員の持っている使命感だと思う。これがあるので、全国どこへ行っても同僚として動ける。緊急援助隊は阪神大震災がきっかけでできた。5月30日で緊急消防援助隊は引き上げた。

被災当日以降

現場に出たのは数日後だった。道路を啓開をして廻って歩いたのは1週間後くらいだったと思う。「えっ、あっ」ばかりで言葉が出なかった。道も建物もなくなって現場感がなく、道を間違えたりした。

自宅は山田町織笠の奥なので被害はなかった。震災から3日後に娘が消防署に来て「あ、お父さん生きてた」が開口一番だった。30日間くらいは消防署に寝泊まりしていた。食事はいつも泊まっている者たちなので、お手の物だった。支援物資でおにぎり、パンなどが来た。食べられるだけでありがたかった。消防署の事務をやっている伊藤千明さんと消防団の高田由美さんが朝昼晩と食事を作ってくれた。

女性消防士は平成25年にはじめて採用した。採用試験を受けて4月1日に消防職員となり、6か月間消防学校に通い、その後配属になる。今年(2013年)は女性を含めて6名採用した。採用倍率は6～10倍。近頃は公務員になるための専門学校経由で消防に来る人が多い。自分たちの頃は安定志向で入った。消防は地元にいるのでこれが良いと思った。山田町の試験で消防団として入り、広域から辞令が出た。今とは仕事の中身が違う。

昔の救急車は言ってみれば運び屋だった。今は消防学校の救急過程を経て医療や手当の知識を身につけているので、救命率は上がっている。メディカルコントロール体制の構築が顔の見える関係になっている。大震災の時は病院の透析用の水は消防車を使って運んだ。DMATは消防本部に来ることになっていたが、宮古病院に廻ってもらった。医療関連では県の振興局からの担当者と、保健所からも詰めていた。

反省点としては殉職者を出したこと。この事実に対して、どうすれば良かったのか、世間の救急要請を断れるのかという葛藤がある。津波に飲まれながらも何人も帰ってきてくれたことはうれしかった。隊長が帰ってこないと聞かされ、信じていれば帰ってくると自分に言い聞かせたが、帰ってきてくれて男同士抱き合って泣いた。

私は平成23年度に早期退職の予定だった。定年は60歳。3・11が起こり、消防長から依頼され残った。

忘れられないこととして、自衛隊の幕僚長と毎晩夢物語を語り合ったことだ。困難を乗り越えることなどを語り合い、癒やされたのかもしれない。

伊藤伸さん（昭和57年生、当時は宮古消防署勤務、宮古出身）に2013年8月8日に話を伺った。

当日は消火隊だったが、担当している係が通信係だったため、震災直後は通信勤務のため、指令室に残った。大きな揺れの後、防災行政無線を使用しての地震広報、情報収集、消防団の出動指令及び水門閉鎖情報の管理、消防車による津波警戒出動指令などを行った。地震の影響による救急要請もあり、救急指令を出した。地震後は管内が停電となり、情報の入手は無線のみだった。自家発電が作動し、指令室の機器の電源は確保できていたが、テレビは映らずテレビによる情報収集はできなかった。地震後すぐの情報としては崖崩れの発生、交通障害の連絡が無線を通して入ってきた。大津波警報情報はJアラートと気象庁からのファックスのみで、津波広報はファックスの情報を元に市の危機管理課と協議しながら防災行政無線で放送をした。津波が来襲し、無線が入ってきた際に「壊滅」という言葉が入ってきたが理解できなかったことを覚えている。その後「金浜地区が全滅」「人が取り残されている」「負傷者が多数いる」などの情報が入った。これは未曾有の災害で、津波による被害であることは認識したが、すぐには理解できていなかった。津波が防波堤や陸地を乗り越え被害を出していることがイメージできず、正直なところ「なにをしゃべっているのだろう」と不思議に思っていた。その辺りでラジオによる情報収集も始めたと思うが、市内の被害や対応などの処理に追われてよく覚えていない。他の地域がどうなっているのかとか、気にする余裕は全くなかった。通信員は市内の被害状況、活動状況、負傷者の情報が多数入り、その指示や情報管理に追われていた。

他には広域消防としての状況確認などをしていたと思うが、断片的にしか思い出せない。田老分署が津波による被害や火災で連絡がとれない事は把握できていたが、宮古消防署の救急車が被災したことは、他の通信員は把握できていたと思うが、私は把握できていなかった。知ったのは職員が集まって後の会議の席だった。指令室で通信勤務をしていたのに把握できていなかった。その情報を知ったときは悲壮感と共に無力感を覚えたことは記憶にある。

司令室に入っている通信員は4人くらいで、2、3日は司令室に籠もり、通信を離れなかった。宮古広域消防は宮古市全域、山田町、岩泉町、田野畑村まで管轄しており、各地域の被害状況を確認したり、職員の安否確認をした。当時のことは忙しすぎて何をしたのかは断片的にしか思い出せない。仮眠を取った記憶もなく、はじめて睡眠を取ったのもいつだったか覚えていない。

数日後に通信員の交代があり、救急隊になり、出動ではじめて外に出て現場を見た。そのときにはじめて瓦礫の山を見て津波の脅威や被害の実感がでた。見慣れた町並みや風景はなく、とても現実のものとは思えなかった。

火災の発生も続き、宮古消防署全職員が何日間か署に詰めて対応した。一時帰宅となったのは3月下旬頃だったと思う。一時帰宅の際は、親から親戚の安否確認や避難状況を聞き、日常の生活品や食糧の買い物、自家用車の給油をして、布団で睡眠を取った。津波で被害を受けた親戚の家の片付けには参加することはできず、兄がしていた。その後は3つの中隊で各2日勤務をするというサイクルで勤務していた。

緊急消防隊として盛岡市、秋田県、そして横浜からも次々と来た。盛岡市はその日の夕方には到着しており、応援で活動していただいた。市役所が被災し、宮古消防署には市の危機管理課職員、警察、自衛隊が集まり、震災対応をしていた。

また3階の体育室は避難所となり、住民の方が集まっていた。いろいろな方の応援や協力を得て、災害対応を行うことができたが、災害のことを思い出すと無力感しか思い出せない。

(3) 田老分署

佐々木勝彦さん（昭和32年生、岩泉在住）に2013年3月28日に話を伺った。

田老分署に来て4月で5年目になり、消防第二係長をしている。

田老分署について

署員を三班に分けて、隔日勤務で1当番約4人で勤務している。

3月11日は非番で自宅に帰る日だった。8時30分に勤務交代したが、この日は金曜日で当番者と日勤者が勤務する勤務人員の多い日だった。用事があったので久慈市にいた。新築のコンクリート製の建物の中にいたときに地震が来た。建物の中の女性はその場でしゃがみこむ人もいたので、安全な場所に移動したが、揺れは長く、経験したことのない大きな揺れだった。

津波が来ると確信したので、田老分署に行こうとしたが、海岸沿いの道路は危険だと思い、山側の岩泉町安家経由を選択した。車で移動し始めたが信号機が赤で停止していると、また地震が来て建物の中から人が避難してきた。ラジオでは大津波警報3メートルと繰り返していた。岩泉駅前の自宅に戻り、身支度をして岩泉町小本経由で田老分署に向かった。三陸鉄道小本駅の道路まで津波が押し寄せ、瓦礫で通行不能だった。そこで広域消防なので地元の岩泉消防署に引き返した。

17時頃、消防本部の偵察隊から田老は壊滅状態、数か所で火災発生との消防無線が入った。私は火災原因調査の担当責任者なのでどうしても行かなければならないと思い、再度岩泉町有芸経由の山越えで田老に向かった。県立宮古北高校を通り三陸鉄道陸橋付近の道路に19時30分頃着いたが、瓦礫と20センチくらいの泥が堆積していて歩行不能だった。火災は田老の町全体が燃えているように見えた。連絡手段もないので宮古消防署に向けて再度林道を走り始めてすぐに宮古消防署のポンプ隊に出会った。これから田老の火災防御に向かうので、宮古ではなく、岩泉消防署に行き、ポンプ車の燃料を持参してほしいと言われ、岩泉消防署に引き返した。

岩泉消防署について間もなく、岩泉町消防団に田老火災への応援要請が来たので、再度消防団と一緒に田老に向かった。21時頃、田老北側の火災現場に、岩泉町消防団のポンプ車隊2隊と現場に到着して、火災防御を開始したが、激しい火勢でポンプ車隊2隊では手の打ちようがない状態だった。火災現場からは時々ボーン、ボーンという爆発音が鳴り響く中、恐怖におびえながら消防団と建物の延焼阻止にあたったが、火勢が強く山にも延焼したので、我々の消防力では手の打ちようがなかった。

消防力を増強しないと効果がないと思い、3時頃消防無線で「一時撤退して、夜が明けてから再度消火を実施したい」と無線を入れたが、「継続せよ」との指示だった。爆発音におびえながら消火活動を継続し、5時頃「一時、田老道の駅に撤退し、6時に宮古市田老総合事務所集合」との無線指示があり、火災延焼中の瓦礫と泥の中を徒歩で田老総合事務所に向かった。

田老分署の庁舎は全壊、速消車に乗車していた同僚は行方不明、指導車も摂待地区で被災、救急車は田老一中のグランドで被災、分署勤務の職員が津波で右肩負傷との状況だった。

その日から消火活動と人命検索を並行して行い、田老消防団の機材と団員と共に田老総合事務所のフロアーに段ボールを敷いて座布団と毛布を並べて宿泊し、田老の山側に位置する末前、養呂地地区の炊き出しのおにぎりを毎食1個食べながら消火活動を続けた。

道路が寸断されていたので、自衛隊が来たのは3日目だった。人命検索と瓦礫撤去を行ってくれた。消防緊急救援隊のヘリコプター、秋田県隊の消火隊が来てくれたが、宮古の災害対策本部の指示で消火活動をするので、我々と一緒の活動はなかった。

車両を全て失ったので、3月25日に宮古消防署の古いポンプ車1台が配置され、4月12日には北上消防署から寄贈された速消車が配置された。5月6日から拠点を新田公民館に移した。鉛筆1本、電話、カメラもない中で、火災原因調査のできることを行った。2か月後にグリーンピア三陸みやこで、沖縄の精神科医による問診を全員受診した。

今回の教訓として、消防分署は高台の浸水区域外に置くことがベストだと感じた。助ける職員が被災したのでは住民の救助はできない。同僚3名をなくしてしまったことが残念でならない。同僚の中には自宅を流され、母も行方不明でありながら消火活動に従事せざるを得なかった者もいた。消防団も自宅流失、家族、親戚の安否も確認できない状態のまま、消火活動を行っていた。頭が下がる思いである。

現場活動1週間後に夕方の会議で、「消防団を休ませてあげたい」との提案があった。これに対して消防団幹部からは、「それは一番危険なことだ。消防団活動があるから気が紛れている。自宅もない、家族の行方もわからない団員を休みにすると、何をするかわからないから危険だ」との意見が出た。これにより消防活動は休みなしで続行との判断が出た。人の命を守るためには適切な状況判断が必要であることを痛感した。

小林徳光さん（田老分署、田老在住）２０１３年8月10日、12月24日に話を伺った。

平成25年度「防災啓発研修講習会」で1時間の発表をした。

日時　平成25年7月4、5日

場所　消防総合科学センター（虎ノ門日本消防会館）

主催　総務省消防庁

避難に関する具体的な行動

今は「来るかもしれないから気をつけろ、海のそばは危険だ」としか言えない。緊急地震速報が出ても、8月8日のように何もなかったという事がある。こうしてそのまま80年がたった。堤防があるから安心だという気持ちがある。

三王閣のあった高台から見ていれば「とんでもない津波が海から来ている」と言うことがわかるシステムがあるとよい。こうした海の映像が見えるような状態にあれば、へそ曲がりも逃げられる。海の波と並行となる位置で、対象となる岩が常に見える位置にカメラを置く。水平の位置で対象となる岩をカメラで監視し、いざとなったら市民もこの映像を見られるシステムを作りたい。

3月11日とそれ以降

当日は脱臼したが、家屋の下敷きにならず助かった。動かさなければ大丈夫だったので、翌日盛岡の岩手医大で治療を受けた。波の来ない、水の寄らない場所を通って盛岡まで行けた。ガソリンが足りるか問題だったが、知人から融通してもらった。電気がないためにガソリンスタンドで手回しの人力で入れていた。

田老分署では5日目まで誰も家に帰れなかった。私は14日に家に戻り、15日から署に戻って仕事をした。田老出身者が分署に3人いたので、顔見知りの者がいた方が、他所から来た人に対して地元対応ができた。夜に人が入ってきたり、真っ暗な中で人が歩いていたりして、防犯上、人を見ても誰だかわかる者が必要だった。

5日目に山田町に家のある職員が「上がる」と言い出した。5日間戻れずにいたので、交代で家に戻れるように分署長から「交代命令」を出してもらった。寝たきりの母を家に残していた署員は、盛岡にいて母を助けられず、何もできない状態だった。

携帯が通じたのは6日目。山田町から来ている職員にはその日「家に帰ってみろ」と命じられて、バイクで帰ることができた。15日の朝自宅に帰ると「幽霊が来た」と言われたという。自宅が罹災した職員は4人いた。前年まで田老にいた職員が2人来てくれた。公休を利用して来てくれたのだ。

大災害は体験してみないとわからないことが多い。訓練と実際ではタイムラグがある。訓練では1秒単位で行動しているが、実際には1秒が1分かかる。宮古から消火に来るにも、岩泉経由なので、1時間30分以上かかる。いろんな事があったと思うが、考えていない時間がものすごくあったと思う。

三鉄の駅の向こう側まで救急車が来られるので、そこまでけが人を運んで待機し、そこから病院まで運ぶため、三鉄の線路上を運んだ。本社には許可をもらったが、久慈から来た保線区員には「何で使う」と怒られた。患者は布のタンカに乗せて体育館からみんなで線路に引っ張り上げた。５００メートル線路上を運び、救急車に乗せた。骨折した若い人、歩けないおばあさん、透析患者などを運んだ。2日目以降は道路脇の瓦礫をどかして国道が通れるようになり、線路を歩く距離が縮まった。3月15日には国道がまっすぐ通れるようになった。

解体業者のSさんの母と息子は、保育園に迎えに行って行方がわか

らなくなった。大おばあさんも家にいて、行方がわからなかったため、翌日には重機を入れて、家族を探す作業を始めた。そしてそのまま小学校から国道へ、そして北の方面へ重機で国道を開削した。Sさんは許可も得ず、自分の息子を探すと言って重機を動かした。人捜しのため国や国道事務所に頼むようにともめたようだが、作業が始まり発見できた。

前の本部次長だった金沢さんは、たろう観光ホテルの裏にあった自宅に戻り、家の裏山に逃げた。そこへ水が防潮堤を超えてきて、水に飲まれながら流されてきた人たちもいた。家の裏山付近が出火場所で、煙が発生していたが3人を引き上げて助けたと聞いた。そしてまずは逃げようと尾根伝いに逃げたが、1人はだめだったという。

堤防の上を2人が走っていたようだったが、1人はだめだったという。漁協ビルの北側の第一堤防を波が越えた所では、1人は助かり、3人はだめだったと聞かされた。副分団長は水の中に浸かって「このまま死ぬんだなあ」と思ったという。彼は「2回死ぬと思った」と言っていた。甥っ子が分団員だったが、亡くなった。

始めに波が届いたのは小林地区で、そこから波が左右に分かれた。水門の遠隔操作が効かず、職員が閉めにいったが、その人はきわどく助かった。逃げて助かったと言うより、運が良かったと話していた。一歩後退した人は助かった。寝たままの人が家にいたかどうかが分かれ道で、そういう人をそうした場所に置いておかざるをえないことが問題だった。しかし助けに行っても「堤防があるから津波が来るわけがない」という思い込みが前提にあったと思う。

田老に来た波は、1波が堤防を満水にして、2波がそれを超えて、さらに3波が山の方まで迫った状況だった。1波と2波の間が100メートルあった。盛り上がった高さは10メートルだが、次の波間での海水の流入があり、2波は100メートル分の水量を運んでくる。

佐々木誠さん（昭和30年生、岩泉消防署副長、岩泉町出身）2013年12月24日に話を伺った。田老分署に4年間勤務しており、災害当時は副分署長だった。

3月11日

当日は分署長と、私と、部下の3名でグリーンピア近くの国道を指導車で走行中だった。強い揺れで、まっすぐに走れないくらい横に揺られた。周囲の車も一度止まっていた。津波が来るだろうと考え、分署へ戻った。10分くらいで戻れた。当日は日勤で、8時30分から5時までの勤務だった。昼夜勤務者は5人、日勤が5人、分署長という体制だった。

情報収集と避難の誘導を考え、出動隊を編成した。宮古広域は金曜日には日勤がいて、人数が多い日だった。田老地域の水ひ門閉鎖の確認、災害弱者の誘導、ポンプ車の出動などを想定した。分署に残った6人は、停電になったので自家発電を作動させ、情報収集に当たった。後の活動のため、1人は津波浸水想定区域外に救急車を避難させた。田老第一中学校は津波浸水想定区域外のため、避難指定地域となっていた。

私ともう1名は摂待地区に出動し、消防屯所に行ったが、誰もいなく、水門モニター監視をしていたが、水門が自動で降りず、手動操作をするために降ろしに行った。その際にラジオのニュースで、宮古で救急車が津波にのまれたと放送していた。水門まで行ったところ、消防ポンプ車に乗った団員が「津波が水門を突破した。逃げろ」と叫び、2台目も同じ事を叫んだ。正面を見ると茶色の煙が見えた。津波とは思わなかったが、すごい勢いで迫ってきて、はじめて津波だと気づいた。大急ぎで車をバックしたが、間に合わず、乗っていた指導車を放棄して、2人で山を駆け上がった。5、6秒位たってからすごい風圧を感じ、バリバリと音がして、津波が来たなと思った。振り返らず山を駆け上がってから下を見たら、真っ黒い水がどんどん山を上がってきた。頂上を目指して峰まで上がってから下を見ると、水が引き出していた。峰をずっと歩いて2時間くらいで摂待のトンネルまで来た。国道に降りると、摂待の人たちが国道で呆然としていた。屯所には数人いたが情報が無く、住民の安否、犠牲者の数などは全くわからなかった。

地震後27分で摂待に着き、30分で津波に遭った。すれ違った消防団

の人はのまれたなあと思ったが、近くのガソリンスタンドで、この2台も無事だとわかった。被災状態を確認しないと次の手が打てない。消防団に人命救助と被災状況の把握を依頼して、消防団のOBの奥さんに田老まで送ってもらった。摂待駅近くの橋に山の木や、摂待の護岸の石などが張り付いていた。水沢地区まで来ると、田老方面に異常な黒煙が見えた。田老の町に入る途中で車が渋滞していて、そこから見ると町がなくなっていた。家が流され、燃えていて、東側の山も燃え、観光ホテルの裏山も燃え、診療所近くの住宅も燃え、その裏山も燃えて信じられない光景だった。

分署に行って、全員の無事を確認したかったが、倒壊家屋等で分署の位置がわからない。坂を下りて行くと遺体も見えた。動ける人には声をかけたが、ほとんど人影はなかった。水に浸かっている人は引き上げながら進んだ。ガソリンスタンドの支柱が見えた。泥が膝から腰くらいまであった。当時の分署は熊野神社のすぐ下にあったが壊滅状態で、署員は見えなかった。

そこで救急車を待機させて中学校を目指した。倒壊家屋の中を人を助けたりしながら、着くまで30分くらいかかった。救急車の回転灯が見えたが、潰れていた。中の医療器具を持って、避難所だった体育館に行くと、隊員1人と15、6人の避難者が濡れたままでそこにいた。寒さをしのぐため、赤白幕を配り、そこにあるストーブを集め、けが人のそばに隊員をはり付け、救急車にいた隊員と夜を明かそうとしたが、体調不良者が出てきた。三鉄の線路を歩いて、総合事務所から職員が来た。避難者は総合事務所、町民会館、体育館にいたが、この間は壊れた車や瓦礫で通れない。一晩分の燃料も足りず、救援を依頼した。10人くらいで担架や毛布を運んでくれたが、全員で避難しようと、一中と町民会館にいた全員を総合事務所に避難させた。真夜中だったので線路を辿って避難させた。この間余震は感じず、目の前の人を避難させることでいっぱいだった。

総合事務所には多くの避難者がいて、3階まで解放して、応急手当をしていたが、署員の安否確認はできなかった。

分署に残った人たちは、海の方向に大波を見て、津波が堤防を越えたのを見て、分署を放棄して、通信機を持って山の方向に避難した。途中歩けない老人を連れて、神社の階段下のところで診療所方面から来た波に流された。廻りで見ていた人たちがロープを使って、署員は助かったが、靱帯と筋がやられ、歩けるまで2年かかり、また右手も負傷して1年以上字が書けなかった。助けたおばあさんは波のため、手から離れていった。

72時間以内の救出

総合事務所では、田老は壊滅状態で、食糧もない、負傷者1名、不明職員3名と本部に無線で連絡した。駆けつけた署員を含め11名だった。装備は全て流され、裸同然の隊だった。夜明けを待っても3名は戻らなかった。多くの被災者、救助を待っている人を考えると、72時間以内の救助が必要だ。同僚の捜索に隊は出せない。同僚は必ず帰ってくると信じ、活動方針を、今助かる人を助けながら、被災状況把握をすることと決め、夜明けから活動した。4日目に3人の乗った車が見つかり、2名は車内で見つかり、9日目に1名は車の近くから見つかった。

翌日秋田隊が来たので、状況ごとに来た部隊の振り分けをした。進入路はグリーンピア方面からのみだった。秋田隊の隊長は3人が行方不明だということを知っていた。地元隊は住民優先で救助するように、仲間のことは我々に任せろと言ってもらえた。この3人は自分が指示して出動させたのでつらかった。秋田隊は捜索活動が終わると敬礼をしてくれて、涙が出た。緊急援助隊が2日目、3日目と駆けつけて来てくれて、全国の仲間に折れそうな心を救われた。

自宅へ帰ったのは3月17日。それまでは総合事務所のロビーに毛布を敷いて寝ていた。職員は顔も洗わず活動していた。目の前に自分の家が流されてきて、母親も家にいたことがわかっていたが、それでも探しに行かなかった。職員の1名は、自分の家がローソンの上まで流れ着いていたが見に行けない。暗くなってから見に行ったが、母親は

いなかったとぽつり一言言った。涙が止まらなかった。

17日になると身体が動かない。他から来た人が田老の署員は何をやっているのか、という声が聞こえた。精神的、肉体的なピークを越えていた。被災者に気遣いし、午後から一時帰宅をするように伝え、交代で家に戻した。

4月以降のこと

4月1日に高台にある新田公民館で業務を開始した。何もなくとも通常業務をやるように指示をした。今ある田老分署に移ったのは5月連休頃のことだった。パソコンはなく、無線のみで、ポンプ車は北上消防署からの支援で、救急車は廃車になる予定のものを延長使用した。

データ管理は各分署ごとにやることになっていたので、紙データで残ったものを集め、水で洗った。公表できない記録もあり、外に出しては困るものもあり、必死で集めた。しかしパソコンも紙もなく、すべて手で集めた。40年分を再生するには1年かかったが、10分の1位しかできていない。すべてのデータを広域本部が管理しているわけではなかった。震災後の検討会では、データ管理について話し合った。広域では集中管理をするようになったが、それを遠隔地で管理するところまではいっていない。今後はデータをどうするかは課題として残っている。広域ではパソコンは管理職に1台、各係に1台配備された。

反省点は、データ管理の問題と、殉職者を出したこと。危機管理が足りなかったとの思いはある。あの規模とあの大きさの津波が来るという認識はなかった。大堤防があるための安心感と、油断はあったのではないかと思う。津波が見えたら、もっと多くの人が助かったのではないかという声が多い。

大津波の映像がすぐに流されていれば、また違ったのではないか。田老の町は60年に一度、津波が来て、2回家を建てたが、3回目はもう住みたくないという人がいる。

震災以降に津波到達予想時間の10分前までに避難を完了することが決まった。田老の消防団は震災前に決めていた。宮古では震災後にこれを決めた。岩泉町でも震災後に決めた。田老の消防団では9、10人の被害が出た。宮古全域では15、6人。未だに不明の者は4、5人いる。

18歳で広域消防に入った。40年分の記憶が一瞬真っ白になった。津波の泥はひどく、くさいので、後始末が大変だ。今も整理は続いている。

家では両親がいて、父は入院し、病院では私が死んだという噂が立ち、1週間戻らなかったので、心配された。妻は被災した方々のお世話で、夜遅い帰宅が続き、高齢の母はほぼ1人の状態となっていた。会ったときに泣いて大変だったが、家族の力を実感した。明日へ向かう勇気となった。

⑷　川井分署

永田勘一さん（昭和29年生、川井分署、川井出身）に２０１３年８月８日に話を伺った。

３・11当日は休みで家にいた。揺れが強かったので、言われていた宮城沖地震がいよいよ来たのかと思い、すぐに出勤した。停電のため、自家発電に切り替えて、情報収集をした。宮古に応援隊として出動し、無線でのやりとりなどをした。沿岸の隊員たちは被災してここまで来られなかったので、8名で活動をした。ポンプ車が車検のため宮古にあったので、機材はそろっていた。指導車隊と、救助機材もある速消車隊とで出動した。普段は1隊4、5名で、通信は川井に残る。川井には16名いて、5人が1組で3隊、分署長は日勤となる。発災時は1隊が川井に残り、2隊が応援に駆けつけた。2～3日は寝ないで活動をした。本部からの指示により津軽石で活動した。駒形橋を通って中学校方面へ行った。状況は津軽石川を水が乗り越えて住宅の1階部分が冠水していた。夜間作業だったが、停電のため暗闇の中で活動をした。屋根の上に女性が1人いた。瓦礫でそこまで行けず、助けるため三連はしごを持ってきてもらい、全長15㍍まで伸ばすと届いた。一度は屋根まで渡ったが、「だだだー」という音で、津波が来たと思い、引き返した。恐怖心が先にあった。真っ暗なところを波が逆流してくる。行った頃は1階部分が水をかぶっている状態だった。バスケット担架にそ

の女性を乗せ、引っ張って助け、けががないか確認した。うなっていたが、意識は清明で名前を言える状態だった。指導車で宮古病院に搬送した。それ以降は人を見つけられなかったが、冠水している家々を見て回った。懐中電灯で灯りの点いている家があり、大丈夫か確認して、待機してもらった。夜の活動ではそのとき助けられる状況ではなかった。名前、住所、年齢などを聞けるだけ聞いて本部に情報として知らせた。5、6軒くらいは2階に避難している家があった。

2日目は藤原方面へ行くよう指示が出て、自衛隊と共同で人命捜索を行った。これは1班から3班までが行った。自衛隊数人と消防署員1、2名で組んで人命捜索を行い、遺体1名を発見した。藤原は古い家は流されたが、丈夫な家は建っていた。声かけをしても家の中にいる気配はなかった。

3日目以降は指導車に7、8人乗って田野畑に行った。一緒だったのは川井と新里の人だったと思う。各分署から5名ずつ詰めるように指示があり、応援隊の道案内をした。

1日の作業が終わると分署に戻る。比較的早く戻れた日は家に着替えを取りに行ったりできた。1週間くらいは分署に泊まった。

外部の応援隊は本部の3階に泊まっていた。当初3階にいた避難者は指定避難所に移り、その後応援隊がそこに入った。

山田では人命捜索は4月いっぱいまでやった。打ち切りは各消防署の判断になる。被災の状況が地域によりそれぞれ違うので、これは各地域によって異なる。川井分署では4月5日から通常勤務が入り、指示があればその都度山田や田野畑方面に行ったり、庁舎の片付けなどを行った。

消防活動以外では炊き出しもやった。婦人消防協力隊や地域の防火クラブの人たちがやっていた。ここの隣にある給食センターや公民館でおにぎりを作り、宮古まで運んだ。この地域では火災などがあれば協力して炊き出しをやる風習が以前からあった。

自家発電は軽油さえあれば問題ない。車両に積んであったり保管庫にもある。宮古消防署のガソリンタンクがある。中継局にもバッテリーがある。無線はバッテリーを充電しておけば1週間は持つ。週1回の定期充電で間に合う。無線は通話のみなので、アナログ機の方がこういう場合には便利だが、そのためのバッテリーの製造が中止になった。消防や救急用の無線はデジタル化している。3・11の頃にはデジタル化はまだ途中で、このあたりはまだだった。平成28年5月末が使用のタイムリミットなので、復旧補助金で今年度中にデジタル化が完了する。震災の時は停電が1週間くらい続いたが、アナログだったので問題はなかった。

震災ストレスは皆抱えていた。職員4人が殉職したので、ショックを受けながら活動していた。使命を持っていたので弱音は吐きたくなかった。メンタルヘルスケアの先生を招いて、講演を行い、個人の相談を受け付けると言われた。反省として検証はしている。危険を伴う仕事なので、2次災害を考える。「逃げる勇気を持て」という言葉が新しく出てきた。「助けられなかった、くやしい、何のための消防だ」という思いが強い。現場の指揮隊の判断が重要視される。危険を顧みず一番先に行くと思う。助けられないと自己嫌悪に陥る。安全管理も想定外だった。我々も怖じ気づいた。太刀打ちできない状況だった。その後、勇気と希望が持てる言葉があった。「消防職員が自らの命を守ることが、その後の消防活動において、多くの命を救う基本である」というものだった。「撤退」「退避」する勇気と、それを見極める判断力が職員を護り、その後の消防活動に備えることができる。

消防団の安全管理マニュアルを新しく作っているが、住民の理解が不可欠だと思う。避難リーダーの問題は、率先して避難するべきだと考えるが、「先に逃げた」と言われる。避難行動を率先して見せることもこれからの役割だと思う。1人も殺さず皆を生かす「無殺多生」が本来の使命だ。安全管理の研修と、どうあるべきかを教えてもらう。大規模災害では線を引けるものはない。

逃げるのではなく「避難」。職場では「退避」。「津波災害退避計画書」を消防団用にも作成した。これができて楽になったという。根拠ができて、見切りを付けて退避し、次の準備に入れる。

⑸　新里分署

澤口義知さん（昭和46年生、新里分署、川井出身）に２０１３年８月８日に話を伺った。

３・11は非番で朝家に帰り、長い大きな揺れがあった。すぐに準備し分署に向かった。ＩＢＣラジオの情報で津波は20㌢位だと言っていた。分署に着いて管内の警戒に廻っていたが、暫くして無線が騒がしくなってきたが、山間部なので断続的にしか聞き取れなかった。

何かあったのではないかと一緒に警戒に廻っていた職員と話していた。分署に戻ると停電になっていた。17時頃宮古が大変なことになっていると不確実な情報が入っていた。情報がないとどうしようもないので、発電機でテレビをつけて見ると、田老の映像が映り、皆黙ってしまった。

19時頃、宮古からの無線で３人の派遣依頼があった。また本部から消防分団派遣要請があり、翌日６時集合とのことで、電話が不通だったので分団長宅まで行き、口頭で伝えた。

１日目、２日目は新里で待機し、管内での異常確認を行っていた。

３日目の夜に本部から田野畑管内の捜索に行くよう要請があり、翌日６名で出動した。その翌日は宮古本部詰めで、山田の支援に秋田援助隊の道案内に出た。

５日目くらいまでは覚えているが、それ以降は今日が何曜日で何日なのか記憶がない。本部に集まって援助隊の道案内が主な業務だった。５、６日目にやっと45号も通行できるようになった。それ以前は警報等があれば山の方を迂回していた。

「今日は援助隊の何々隊」と割り振られ、秋田援助隊と共に行動した。「今日は男鹿消防署です」「今日は角館です」と言われて山田に向かった。

秋田県の人は観光等でこちらに来たことがある人達が多く、逆にたくさんの気遣いを頂いた。大館から来た人は山田にも行ったことがあり、現場を見て大泣きしていた。宮古や山田のことを思ってくれていると思うと、うれしくもあり、悲しくもあった。寝ていないのを知っているようで、後ろで休んで良いよと言われたが「だいじょうぶ、がんばりますよ」と言った。すごく気を遣ってもらってありがたかった。被災した方々はもっと辛いしきついと思った。それに比べればきついとは思わなかった。

救急業務が主で、山田の患者のいる家まで道案内をする。山田病院が被災していたため、患者はすべて宮古病院に搬送した。１件だけ千徳の三陸病院に搬送した。ドクターの判断で盛岡での治療が必要な場合は、盛岡隊が搬送していたと思う。国道１０６号は通行できた。救急車が４台あり、フルに出動していたが、山田の出動体制が整うに従い、順に減っていった。夕方、搬送が終わると本部に報告し、新里に戻って泊まるか、家が近い人は帰る。１週間位分署に泊まっていた。家に帰っても時間が遅く、家族は寝ていた。自宅から新里分署まで25分位かかる。次の日も朝６時出発なので間に合うように家を出るが、いつもよりすいている。朝晩は物資輸送のトラックでいっぱいだったが、昼間はそうでもなかった。

前の晩に次の日の集合時間が知らされ、署員に伝える。明日は５人とか、10人とか呼ばれると、当番者を残し宮古へ向かう。10日位たった辺りから休みが取れるようになった。

山田に始めて支援に行ったとき、水門が店に真横に刺さっていたのがショックであり、信じられない気持ちで一杯だった。一瞬夢を見ているような感じがしたが、それはまぎれもない現実だった。自分を保とうとするのがやっとだった。２週間位禁煙していたが、また始めてしまった。

山田勤務の経験があったので、避難所でその頃知り合ったおじいさんや、おばあさんと会えた事が少しうれしかった。一人暮らしのおばあさんが何度も津波に遭っていて、石垣を高くしたから大丈夫だと言っていたが、ちゃんと逃げてくれて、会ったときは抱き合って喜んだ。本当にうれしかった。

４月に入ってから、休みも増えて、自分にできることをしようと、地域の人たちに声かけをして集めた絵本や米等を、山田の保育園と避難所に届けた。

たまに亡くなった後輩のことを思い出してしまう。同じ地区出身なので、彼の父とはたまに飲んだりする間柄なので、お盆は昔話等をする。山田、田老などで知り合いが亡くなったりしていた。

家の被害はなかったので、現場を見ている自分と、家族にどうだったかと聞かれて説明できなかったことがきつかった。着替えを取りに帰ったとき、中学2年の長男に「後を頼むぞ」と言って出てきたが、長男がとても大変そうだったと聞かされた。妻や母も大変だったと思う。自分は仕事だからしょうがない。

山田で患者宅に行くとき、その場所の目印が何も無くなっていて、見つけるのが大変だった。援助隊に「ちょっと待って」と言えなくて厳しかった。

消防に入る前、建設設備の仕事をしていて結構きつかったが、どの仕事も楽なものはないというのが本音だと思う。

おわりに

誰もが必死だった大震災への対処だったが、消防署員は最前線で活躍していた。震災直後から消防署に詰めていた署長は、1週間後に町に出て、はじめて津波後の光景に接した。その衝撃が忘れられない。自分の記憶との落差に「えっ、あっ」ばかりで言葉が無くなってしまったと語った。さらに自分の生存さえ家族に知らせる術も無く、震災から3日たって再会した娘からは「お父さん生きてた」と言う声が返ってきた。

指令室に缶詰になっていた署員は無線で入ってきた「全滅」とか「負傷者多数」という件や、「津波が堤防を乗り越えた」という情報をイメージできなかったと語っていた。

また秋田隊の道案内をしていた署員は、かつて勤務していた土地でさえ、津波で全ての家屋がさらわれた跡では、自分がどこを走っているのか理解できず困ったという。この違和感は津波後に町を歩いた者ならば誰でも経験したことだ。家も電柱もなく、瓦礫の山と化した土地や、更地になってしまった地域に立って、今自分がどこにいるのか、ここはどこなのか、不安に駆られたことが何度もあるはずだ。そうした中での救助活動だったのだ。

3　警察署

はじめに

『東日本大震災と警察　平成23年　回顧と展望』（２０１１　警察庁）によると、被災地における警察の活動は、避難誘導、救出救助・捜索、交通対策、検視・身元確認、原子力災害への対応、安全・安心の確保がある。また被災地での警察を取り巻く状況については、警察官の被害、警察施設の被害、過酷な勤務環境などが見られる。そうした警察活動の支えとしては、全国警察からの特別派遣、警察の情報通信、関係機関との連携、医師・歯科医師等との協働、ボランティアや民間事業者との連携、海外からの支援部隊、そして被災者との交流・激励が挙げられる。

ここでは宮古市内で活動された方々の記録を、岩手県警宮古警察署勤務の方々からの聞き書きと、岩手県警察本部監修『使命　証言・岩手県警察の３・11』（岩手日報社　２０１３）に掲載された記録から振り返ってみてみたい。

(1)　宮古市の場合

『岩手県　東日本大震災津波の記録』（岩手県　２０１３）によると、田老地区中心部の被害は、宮古市全体の建物被害における全壊棟数２千６７７棟の約27％に当たる７２６棟（平成24年６月29日現在）がこの地域に集中している。また死者・行方不明者数も１８１人と市内で最も多い状況となっている。一方宮古市中心市街地は、宮古駅を中心に末広町商店街や中央通り商店街が広がる区域に被害が広範囲にわたっている。

宮古警察署は東日本大震災において警察署１階部分が水没し、また２名の警察官が職務中に津波に巻き込まれ、被災した。

このあたりのことを２０１３年５月２日に当時の宮古警察署　副署長小野寺啓泰さんから伺った。警察署の１階は水につかった。警察法に基づき、県公安委員会から警察庁を通じ、応援依頼をした。これには２段階ある。第１は被災直後で、手続きは後でも良い。警察庁からの要請となる。県警本部（盛岡）から全署に指示が出る。各市町村の警察は要請を出せる。２０１２年２月１日より全国から特別出向者をつのり、岩手県警の職員として勤務している。１年間の勤務で、２０１３年の３月31日までで、第２回第２陣は４月１日から始まる。

県警本部警備課には災害対策室があり、宮古警察署にも対策本部がある。県の対策室が中心となり、被災地の対策本部へ出る。例えば陸前高田では朝晩会議をして各部の情報を共有する。県警本部に合わせて解散時期も決定する。宮古では警察署の４階が本部だった。

次に２０１３年８月21日に宮古警察署地域課長の**山田良春さん**と**中屋昌富さん**（昭和26年生）に伺った。中屋さんは釜石生まれで宮古には３回勤務したという。震災の前の年に宮古勤務だった。今は千徳に自宅があり、宮古駅前交番の相談員をされている。

県外からの応援警察官について

県警本部警備課には記録があると聞く。38県から応援に来た。今は青森、三重、香川、高知、大分、沖縄県からの22人が活動している。昨年は40人いた。震災直後は京都府警、山梨県警の広域緊急援助隊が来た。昨年(平成24年２月６日)からは特別出向の形で来てくれている。昨年まではグリーンピアに住んでいたが、今年から新里の仮設住宅に住んでいる。各県から派遣されている職員もこの仮設にいる。岩手県警採用の形式をとり、宮古警察署管内で勤務を執行している。出向組には警視庁、神奈川県警を退職して本県警察官に採用された３人が含まれている。

震災当初は全国から来た警官はグリーンピア、国民休暇村、パークホテルには被災者の避難場所で宿泊できず、県立宮古短大やシーアリーナに宿泊したり、盛岡市や花巻市あたりから通っていた。

震災後の活動状況

駅前交番では所在不明者の受付をやっていた。拾得物受理もやった。

携帯も一般加入電話も使えない状態で、連絡が取れないという人が多く来て、それらを受理した。震災当日は団体のデモ行進の予定があり、配置についていたが、直前に地震が発生、大津波警報が発令されたことでデモは中止になった。即時、海岸方面に進行する車両の交通整理と、海岸方面から避難してくる車両の交通整理に当たったが、停電により信号機が滅灯（信号機が作動しないこと）したことと、警察官人員が少ないため、一時、主要交差点が渋滞した。

予想された津波の高さでは、堤防を越えることはないだろうとの思いがあった。「とんでもない大津波だからまず逃げる」という人と、「とりあえず逃げる」という人の温度差があった。防災無線で「避難してください」と呼びかけても、言葉だけでは非難しない。「すぐそこまで津波が来ている。逃げろ」と言われて逃げ出す人が多かったが、老人は逃げられない。

末広町通りを市役所方面から宮古駅前交差点に向かって、オートバイに乗った消防団員が、「津波はこちらに入ってきた」と大声で叫んでいた。その直後、中央通りから末広町通りに波が車両を押し流して来るのが見えた。駅前交差点で津波の高さは30㌢くらいだった。

津波が引いた後、信号がストップしていたので交番勤務員が交代で交通整理をした。水が引いてから地元住民が避難場所から戻ってきた。停電が回復するまで3日間くらいかかった。沿岸部では長い間、電気も携帯もつながらなかった。数日後に宮古郵便局の屋上からはつながった。警察電話は震災直後はつながっていたが、数日後には通話できなくなった。停電中は水道もストップしてしまった。

自宅にいつ戻ったのか正確に記憶していない。災害対策本部がある宮古警察署にも行けない状況であったが、2日後の夕方に本署に通じる道路の一部が回復したとの連絡があった。

パトカーが被災して使用できず、マイカーで活動するよう指示があった。ガソリンは理由を話して給油し、代金の請求書は宮古警察署宛とした。

震災後体力がついて行かずに困った。寒い時期なので足がつったりした。

駅前交番には、夕方に食事を提供してくれた業者がいたが、数日後、「米がなくなりました。これが最後です。」と話し、米を1升くらい置いていった。

対策本部には、毎朝パネルトラックで秋田県からおにぎりが搬送された。そのおにぎりは堅く、冷たくて食べられなかったが、各部隊に分配した。

対策本部に入れない状態が数日間続いたので、駅前交番に避難者の所在確認のため多くの人が来たが、情報を把握していないので、提供はできなかった。市役所に避難所と避難者の名前を掲示していると思うので、そちらで確認してくださいと教えた。通行止めで行きたいところに行けないと怒り出す人もいた。

震災当初は外部不審者が多く入っているという連絡が多数あったが、取り締まれる状況ではなかった。2週間後頃から、夜間に自衛隊のMPと表示した車両が赤色回転灯を点灯しながら巡回していた。道路の瓦礫を撤去して、通行できるようになった頃、市街地でテレビを盗まれたという被害があった。ヘドロ状の泥が堆積しているところへよく行ったなと思う。捜査できる状態ではなかった。

被災家屋は施錠できないため、窃盗事件が多発したので、機動捜査部隊も活動した。2～3週間経過して、少し落ち着いた頃、避難場所の巡回を始めた。岩手県警察の名の入ったパトカーを見て「ほっとする」と言った方もいたという。

緊急援助隊の活動

12日午後、内陸部の警察署からの緊急応援部隊が来た。13日の午後には広域緊急援助隊（京都府警と山梨県警）が来て、休む間もなく主要交差点で交通整理を開始した。

普段訓練しているのは広域緊急援助隊の警察官たちだけだ。他県からの応援は2週間交代で、警備部隊、刑事部隊、交通部隊、地域部隊だった。警備部隊は行方不明者の捜索、ご遺体の収容活動を行った。刑事

部隊はご遺体の検視をして、身元を確認し、ご遺族に引き渡した。千徳の体育館、勤労青少年体育館、田老の県立宮古北高の体育館がご遺体の収容所になった。交通部隊は信号機の停電や、制御板の故障で作動しない主要交差点で交通整理を実施した。地域部隊は街頭のパトロールや避難所を訪問して、被災者支援の活動をした。

発災から半年が過ぎた頃、愛知県から来た機動隊員が「発災時に宮城県気仙沼市に行け、と命じられて、出動したが、被災の状況が全くわからないし、必要な資機材は何なのかわからず、途中のコンビニ店などで弁当の食糧を買いながら来ました」と話していた。

大阪府警の警察官は人気があったと聞く。ドラ周辺に立っていると、女子中高生が話しかけてきたという。

宮崎県や大分県に集中豪雨があったとき、大分県警の機動隊はこちらで活動していた。

平成24年2月6日から特別出向していた三重、高知、香川、大分県からの警察官は、今後発生が予想される南海トラフでの地震・津波対策の研修を兼ねていたようだ。高知県から出向の警察官は、「四国は海岸部が都市で人口が集中しているため、津波が発生したら避難はできないだろう」と話していた。

特別出向者は機動捜査班、交通安全対策班、自動車警邏班、地域安全班の4班で活動した。機動捜査班は車を使用した捜査で、刑事部門とペアで活動した。交通安全対策班は交通の指導取締を行った。自動車警邏班は犯罪抑止のため、パトロールを行った。地域安全班は仮設住宅を主とした巡回を行った。地域に溶け込むため、勤務後にサークル活動も行っていた。ある出向警察官はカッター大会に一緒に出場した。地元出身の警察官も来た。自分の所属地「埼玉県警」のロゴが付いた装備品を着装して、活動していた。

関西方面の方々も来ていたが、来ている理由がわかれば、受け入れる地域住民も「いい人が来てくれた」と喜んでいた。しかし言葉の問題があった。この辺りの人が敬語を使って話すと理解できないことがあったようだ。

海岸部の停電が解消され、信号機が正常に作動し、落ち着いた頃、心理ケアのためのアンケート調査があり、項目に該当する者は、資格のある人が来て、面接を行い、メンタルケアを実施した。

今後に備えて

自分が何をするのか、普段からよく考えておくべきだった。それを考えておかないとうまく行動できない。

大津波警報が発令されたら、海岸部に通じる道路を封鎖するべきだと思う。但し海岸部から避難する車両の通行は確保しなければならない。防災無線でどの地域はどこの高台へ避難すべきか指示するべきだと思う。ラジオや無線を聞いていない人もいる。

前年には田野畑村にいたが、チリ地震津波警報が発令されても、やはり逃げなかった人がいた。「またか」という思いが強い。

大船渡市三陸町出身の警官（後述の菅原一弘巡査長）は、母親から「地震が発生しても30分は大丈夫だから、その間に逃げるなり対策をするように」と言われていた。だから震災の時には災害救助などの活動ができるように服装を着替えた。同僚にも「災害活動ができる服に着替え、落ち着いて行動するように」と言ったという。本署にはパトカー等数台が置いてあったが、これらは全部使用できなくなった。

平成23年8月「一致団結　宮古署　贈　特別出向者一同」と書かれた大漁旗が宮古警察に飾ってある。

以下は寄せ書きの一部で、これは全国からの出向者の方々が寄贈したものという。

「自分たちが日本史上未曾有の

写真　「一致団結　宮古署　贈　特別出向者一同」と書かれた大漁旗

震災発生に伴う出向で」

「震災そのものを風化させてはならない」

「被災地の安心安全をと言う志を一つに、出会い、一致団結して奮闘した仲間がこの宮古署にいた事」

(2) 宮古警察署管内警察官の方々の手記

ここからは岩手県警察本部監修による『使命　証言・岩手県警察の3・11』（岩手日報社　2013）からの引用である。主に宮古警察署管内で東日本大震災を経験された警察官の方々の手記を選んだ。当方で適宜省略した形で掲載しているので、文責は筆者にある。

菅原一弘さん（宮古警察署、巡査長）の手記

困難極めた被災状況の把握

「あの日、私は人事異動対象で送別会を終えた後、事務引き継ぎを行いながら本署と宿舎を往復して引っ越し準備を行っていた。突然地鳴りとともに天井の蛍光灯が揺れ出し、激しい横揺れに積み重ねた段ボールが崩れ落ちた。強烈な揺れの中で、「大きな津波が来るな」と両親らの話を思い出しながら、いよいよ現実のものとして襲ってくるという緊張に胸が押しつぶされそうだった。

宿舎前の国道45号は、停電で信号が滅灯して大渋滞が生じていた。その中を縫うように事故処理車両などの緊急車両がけたたましくサイレンを鳴らし、津軽石方面に向かって行った。

宮古湾は潮の干満が始まっており、次第にその激しさを増し、海底が見え始め、大型ヨットが底を着けて傾いた。

至急報を告げるチャイムは鳴り止まない。刻一刻と迫ってくる津波に署員は不安と緊張のため顔を強ばらせていた。

重茂半島北端の閉伊崎付近の海水が異常に盛り上がり、「黒い壁」となって宮古湾の奥へと迫ってくるのが目視できた瞬間、県内系無線では大船渡署員の「津波の襲来を確認」という第1報が流れた。第1波はひたひたと水かさを増して、ほんの数秒の内に署前の防潮堤を静かに満たした。そして引くまもなく、第2波が上から覆いかぶさるように襲ってきた。流れ込んだ濁流は庁舎1階を完全に水没させ、漂流するガスボンベからはガスが吹き出した。

そんな中、避難誘導に出動した数名の署員がなかなか戻らなかった。自分の子どもと同じ年の2人の男の子がおり、そのかわいらしい顔を思い浮かべながら、「頼む、生きていてくれ」「死ぬんじゃねえぞ」と祈った。

翌日は雪景色だった。余震と津波警戒に対する防災無線の中、管内の被災状況の情報収集へ出動した。夕方になって田老地区へ向かい、田老トンネルを抜けて愕然とした。街が無くなっていた。「万里の長城」と称して地元住民の自慢であった巨大な防潮堤の一部だけが残り、津波は町の全てをのみ込み、消滅させていた。

情報が錯綜し、陸路からの被災状況が瓦礫によって遅々と進まない中、上空からのヘリによる情報収集は非常に助かった。その中で大きな問題が生まれつつあった。頼みの綱である連絡手段が県内系と共通系の2波の警察無線のみでは思うように伝達ができず、把握がきわめて難しくなってきた。「無線に出ろオ」「呼んでんだってエ」と、皆がワラにもすがる思いで必死だった。

このような状況下から署の運用再編成がなされ、上司から統括班の役割を任されたとき、「この席に座ったら、覚悟しろよ」と話された。各署員が動いている状況をもれなく把握しなければならない。統括班のメンバーと四六時中、無線、衛星電話機、メモ紙、ホワイトボードとのにらみ合いが始まった。

現場でヘドロの混じった砂埃の中を必死になって駆け回ったり、かけがえのない家族を失った無念さを察しながら、黙々と検視業務を進めたり、遺族とともに涙を流すなど、活動を展開している署員や応援に駆けつけている各隊員のためにも、片時も報告を聞き漏らさず、少しでもスムーズに運用させるという一念だった。

被災地に入った応援部隊は、氷点下の夜間を普通車で車中泊を繰り返しながら検視業務を続けた。窓ガラスの壊れた体育館で外套だけを

身にまとい、寒さを耐えしのぎながら、連日の捜索作業に従事してくれた部隊もいた。まさに想像を超える過酷な状況の中での勤務であった。

犠牲となった市民の方々、そして職員のためにも「絶対に負けられない」という気概を持ち続け、この震災を風化させてはいけないと思う。」

鳥畑拓真さん（宮古警察署、巡査）の手記

忘れられない初任地での経験

私が東日本大震災を経験したのは、初任科課程を修了し、初任地の宮古警察署港町交番へ配属され、職場実習が始まって1か月が経過したときだった。

震災当日、小さな揺れが次第に強くなり、部屋から飛び出した。同じ港町交番勤務の先輩から「本署へ行くぞ」と言われ、参集の準備をした。

徒歩でもこれ以上本署に近づくことは困難と思い、駅前交番まで引き返そうとしたとき、地域の人が水没した住宅街の方を指さしているのが見え、その先を見ると漂流していた木材の上に何かが乗っているのが見えた。見ると流された木材に50歳くらいの男性がぐったりしてつかまっており、大声で呼びかけても反応は無かった。腰まで水に浸かりながら助けに向かったが、男性は意識がもうろうとして会話をすることはできなかった。私はそのまま背負って避難所の宮古市立河南小学校まで運び、応急手当をしてなんとか助けることができた。

その後渋滞が発生している交差点で交通整理を行い、深夜になって宮古署へ戻った。署の4階会議室が対策本部になっていて、そこで初めて港町交番の中村所長と村上巡査長の2人と連絡が取れていないこと、自分も行方不明者として扱われていたことを知った。

翌日から始まった遺体の搬送は足場がとても悪く、車両が進入できないところがほとんどだったため、毛布を使った人力での作業となり、ご遺体は何倍もの重さに感じられた。

毎晩遅くまでの勤務が続き、誰しもが疲労のピークを感じていた中でもがんばることができたのは、終礼時に署長を始めとする幹部職員の方々に「今が一番つらい時期だが、それでも私たちは警察官なのだから弱音を吐くことはできない」と檄を飛ばされ、明日もがんばろうと思えたからだ。

電気がまだ復旧していなかった頃、明かり一つなく真っ暗な街を本署の4階から眺めていると、サイレンと共に県外部隊の車両が車列を組んで赤灯を付けながら走ってくる姿が見えた。食料も少なく、増え続ける仕事に疲労を感じていた私たちにとって、その明かりは決して1人ではないという安心感と、そして警察という大きな組織のつながりを実感した。

【引用文献】

『東日本大震災と警察　平成23年　回顧と展望』警察庁　2011年
岩手県警察本部監修『使命　証言・岩手県警察の3・11』岩手日報社　2013年
『岩手県　東日本大震災津波の記録』岩手県　2013年

4　自衛隊

はじめに

今回の東日本大震災における被災地での自衛隊の活動は目を見張るものがあった。被災者の皆様からお一人お一人の記憶をたどって伺ってゆく中で、救い主としての自衛隊の方々の活躍する姿が記憶に焼き付いていると、実感することができる。この項では自衛隊の側に焦点を置き、彼らの初動体制から、被災地での活躍の軌跡等を時系列に従って記録してゆくこととしたい。その際引用したのは、平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）、『ありがとう　自衛隊　勇士たち　陸上自衛隊岩手駐屯地　東日本大震災「災害派遣」記録集（保存版）』盛岡タイムス　2011（引用には『記録集』と略）、そして「自衛隊北部方面隊HP　東日本大震災　災害派遣活動状況　北部方面隊―すべては被災者のために―」（引用には「北部方面隊HP」と略）である。引用文献はこちらで適宜省略して使う。

また2014年8月25日には陸上自衛隊中部方面隊伊丹駐屯地に所属されている中部総監部防衛部長で一等陸佐の滝澤博文さん（昭和38年生、長野出身）をお訪ねして、当時の状況を話して頂いた。滝澤さんは震災当時北部方面隊の第2師団司令部幕僚長というお立場で、宮古市方面の災害派遣の指揮を執られた方だ。

ここでは滝澤さんの話を中心に、時系列に沿って引用文献で詳細を補ってゆくことにしたい。

写真1　第2師団司令部幕僚長（当事）滝澤博文さん

(1)　東日本大震災への自衛隊の対応

はじめに東日本大震災直後、防衛省・自衛隊の取った対応について、平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）より引用したい。すべての自衛隊員の活動が、ここから出発しているからである。

「特集　東日本大震災への対応

1　防衛省・自衛隊の活動態勢

11（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする最大震度7の大地震（国内観測史上最大のマグニチュード9・0）が発生した。岩手県・宮城県・福島県では沿岸沿いの集落が地震により発生した大津波によって広範囲にわたり水没したほか、東京電力福島第一原子力発電所では原子炉などの損傷によって放射性物質が漏出する事故も複合して起こるなど、広域にわたり大規模かつ激甚な被害をもたらした未曾有の大震災となった。

防衛省・自衛隊は、地震発生直後の14時50分に防衛省災害対策本部を設置するとともに、航空機などによる情報収集を行った。15時30分には第1回防衛省災害対策本部会議を開催、18時00分には、大規模震災災害派遣を、19時30分には原子力災害派遣をそれぞれ防衛大臣から自衛隊の部隊に命じた。これを受けて、自衛隊は、地震発生当日から約8千400人の態勢を動員し活動を行うなど、陸自多賀城駐屯地や空自松島基地などが被災し、航空機や車両が水没する被害を受ける中でも、可能な限りの人員・装備を投入して、被災者の人命救助のため、大規模かつ迅速な初動体制を行った。」

(2)　宮古地域での自衛隊の対応

『記録集』には資料として「岩手県内における各時期の自衛隊部隊展開図」があり、いつどの部隊が派遣されたのかがわかる。発災当初に宮古に派遣されたのは、第9特科連隊本部のある岩手駐屯地からの第9特科連隊第3大隊だった。23年3月12日以降も同じく第9特科連隊第3大隊が活躍した。3月16日以降になると、宮古市及びそれ以北の沿岸地方に第26普通科連隊、第2特科連隊、第2戦車連隊、第25普通

科連隊、第3普通科連隊、第11旅団等の活躍が始まる。そして5月18日以降には再び部隊交代をして第9特科連隊が活動している。

では次に**滝澤博文さん**（昭和38年生、当時陸上自衛隊北部方面隊第2師団幕僚長）のお話から記してゆこう。なお、滝澤さんのお立場上、始めに当方から質問項目を提出し、その内容に沿って回答を頂いた。

質問1　「第2師団司令部幕僚長が指揮する自衛隊員の組織と人数」

答　「第2師団の隷下部隊が中心となり、道北地区の各駐屯地警備及び各駐屯地維持に必要な最小限の隊員を残して、約3千７００名の隊員が派遣されました。名寄の第3普通科連隊及び第2偵察隊、遠軽の第25普通科連隊、留萌の第26普通科連隊、旭川の第2特科連隊及び上富良野の第2戦車連隊が、災害派遣の中心的な活動部隊となる。災害派遣に必要な機械力（グラップル、ドーザー、ダンプ等）を一元的に管理運用して活動部隊を最前線で支援するのが旭川の第2施設大隊、ヘリコプターを有して空中偵察及び空中機動を支援する旭川の第2飛行隊、日本一のデジタル化師団としてコンピューター約２００台を持参してシステム連接を担任するのが旭川の第2通信大隊、そしてこれらの部隊の衣食住を支援するのが旭川の第2後方支援大隊であります。また、第2師団固有の部隊に加えて、第11旅団から被災者の生活を支援する部隊として第11後方支援隊が配属されました。」

もちろん震災現場では、北海道にいた北部方面隊よりも岩手駐屯地にいた部隊の活動が早く始まっている。『記録集』では以下のような記述から始まっている。

「3月11日（金）
14時50分　大津波警報発令、東北自動車道全面通行止め（八戸道含む）、岩手駐屯地各部隊「災害派遣準備」、14時52分　岩手県知事が第9師団長に災害派遣要請、15時03分　岩手県庁へ連絡要員派遣、15時13分　岩手駐屯地偵察班出発、16時40分　第9師団は人員約６千６００名で、人命救助を優先して災害派遣活動を実施。

岩手駐屯地から派遣の部隊　宮古市、宮古市田老地区　第9特科連隊第3大隊　青森・弘前・秋田駐屯地から岩手県被災地へ向け移動、宮古市、田野畑村　第9特科連隊第3大隊（岩手）、19時54分宮古市各地区完全浸水（鍬ヶ崎、津軽石、高浜、金浜、重茂）。
3月12日（土）
00時00分現在、宮古市、国道45号線所々寸断、田老、山田町沿岸部延焼中、01時15分　国道１０６号線全線通行可能、05時36分　宮古市田老地区で人命救助活動開始（第3大隊）、航空科部隊　ＤＭＡＴ（緊急医療チーム）６チームを空輸（大船渡病院、陸前高田病院へ2コチームずつ、宮古、釜石各地域に1コチーム）、山田町、宮古市　人命救助活動（第9特科連隊）。」

質問2　「師団長に指示が届き、その後に災害現場に向かうまでのプロセス（準備する人と物まで含めて）」

答　「3月11日14時45分の発災に伴い、部隊には一斉に非常招集がかかった。第2師団は部隊は当日中に概ね派遣体制が完了したが、本州へ移動する船の調整ができず、12日19時30分第1波が小樽港を出港することになった。出港する港及び移動経路は、津波の影響から当初の間は日本海側に限定されており、本州への上陸は、秋田港と新潟港を使用することとなった。通常、部隊を派遣する際には、先遣隊を出し、派遣先の現地の偵察と主力の受け入れを実施する。今回の派遣に際しては、先遣隊は航空機により移動することとなった。

私は、活動部隊の先遣隊と共に13日9時旭川空港から航空自衛隊の輸送機で、ジープとともに花巻空港に先行した。花巻空港からは、災害派遣に向かう自衛隊車両として通行止めの東北自動車道を盛岡まで利用させていただき、岩手駐屯地の第9特科連隊指揮所及び岩手県庁に指揮所を構えていた第9師団指令部に挨拶に立ち寄った。その後、3台あったジープのうち1台が赤色灯を装備していたことから、渋滞していた国道１０６号線を通行する際には、赤色灯を点けて「自衛隊さんどうぞ！」と言って我々に協力してくれる方々の支援を得て、13

日16時30分、無事明るいうちに宮古消防署に到着することができた。宮古消防署到着後は、消防及び市役所の職員の協力を得て、主力部隊を受け入れるための公園、グラウンド、空き地などの選定と前進経路の選定を実施して、携帯電話のメールにより第2師団の各隷下部隊長に前進目標、移動経路などの連絡をして、部隊を派遣地域に展開させることとしました。

発災当日の3月11日は、旭川では「バーサーロペット・ジャパン」というクロスカントリー大会の前日であり、スエーデン大使を招いての大きなイベントを実施していた。第2師団は大会を支援していたことから、スエーデン大使が第2師団司令部に14時30分まで表敬訪問されており、その夜は、師団長以下、レセプションに参加の予定であった。

一方この日の午前中、偶然にも東北沖大規模地震発生時の北部方面隊災害派遣計画（案）に係わる意見提出のため、師団長に対し、災害派遣における第2師団の行動を機能別に説明しており、発災時には、師団長以下すべての幕僚長の認識が統一されていた状況になっていました。

この間の事情について「北部方面隊ＨＰ」では以下のように記している。

「北部方面隊は、11日16時15分に非常勤務態勢に移行、ヘリ映伝による上空偵察、東北方面総監部へ連絡幹部を派遣し災害派遣準備をした。

翌12日、方面航空隊のヘリを東北地方に前進させ、第26普通科連隊を第一陣として派遣、22時現在、第2師団及び第5旅団を主力とする人員1万名以上、車両約3千両が岩手山演習場と八戸駐屯地に前進し、14日朝から救助活動等を実施した。

3月12日第25普通科連隊　遠軽駐屯地出発、車両乗船（小樽港フェリーターミナル）

13日第11後方支援隊　真駒内駐屯地出発、車両乗船（真駒内西港フェリーターミナル）、米海軍揚陸艦による部隊移動」

質問3　「担当する災害援助の地理的な範囲と、その範囲内での部隊数と人数の振り分け。」

答　「災害派遣命令では、計画どおり第2師団は、岩手県北部を担任することとなった。洋野、久慈、野田、田野畑、普代、岩泉及び宮古と逐次到着した部隊を北から展開させる予定だった。しかし現地の被害状況、特に被害は北南の地域が大きいことを踏まえて、部隊展開の要領を再検討することとなった。結論として、第1派で派遣された第26普通科連隊が岩手県北部に向かい前進中であったことから、計画通り北から展開させる一方で、第2波以降については、激甚地域である宮古を重視して、南から展開させることとした。当初の段階では第26普通科連隊が洋野、久慈及び野田、第25普通科連隊が宮古市鍬ヶ崎方面、第3普通科連隊が宮古市南部、第2戦車連隊が宮古市田老地区、第2特科連隊が田野畑、普代及び岩泉、そして、重茂半島が陸の孤島として車両の立ち入りが限定されていたことから、オートバイを保有する第2偵察隊を展開させることとした。

3月12日～14日の間に第2師団の担任地域全域に部隊を展開させた。各部隊長の報告を聞くと、全ての報告は「大変だ！」というものであった。そこで、現地を視察してみると、宮古市田老地区以南が極端に被害が大きいことが判明した。一方で発災後72時間が人命救助の勝負である。被害の程度の差はあれど当面は部隊を動かせない。それぞれの地で救える命がある。発災後1週間が勝負と思い寝ずに仕事をさせた。活動拠点まで戻ると時間のロスが出るので3月17日までは当初の態勢のまま、車に寝泊まりもさせた。

3月17日以降、人命救助の可能性がきわめて低くなった段階で部隊展開の態勢を変更して宮古市に部隊を集中することとした。隊員には「17日まで頑張れ！」と激励して、18日以降逐次、ご褒美として滝沢村の温泉で休養させながら、態勢を田老、鍬ヶ崎、藤原等の南の地域に部隊を集中していった。狙いは、担任地域全域における被害状況に応じた復旧態勢を確立すること及び、被害者に対する生活支援態勢を確立することであった。

人命救助の段階の次は、応急復旧の段階である。応急復旧の焦点は、瓦礫の下に埋もれているご遺体を収容することであった。津波被害の場合は、一番下に重い鉄筋、次にご遺体、上部は木材が一般的な状況であった。隊員には、1日でも早くご遺体を収容すべく叱咤激励した。「4月11日まで1か月間頑張れ！」と号令をかけ、全ての担任地域において瓦礫を全て片付けるように命じた。途中から、山田地区への増援の要望があり、第3普通科連隊の一部を山田町にも展開させた。今回のご褒美は「3日間、北海道に返す！」と約束した。3月は卒業の時期、4月は入学の時期であり、それぞれの家庭においては通常は繁忙期である。北海道では雪解けの時期でもあることから車の手入れも重要な事項であった。隊員は目の色を変えて活動を継続した。その成果として、4月19日に実施された田老地区における防衛大臣視察には、大臣から宮古地区は応急復旧のモデル地区であるとのお褒めの言葉も頂くことができた。

4月中旬以降は、岩手県の宮古以北の地域は生活支援が中心となり活動を継続した。第2師団は、4月12日以降、気仙沼、女川、石巻などに部隊を展開させ、また5月1日からは、釜石、大槌、東松島、そして福島の原発地域にも部隊を派遣させることとなった。」

『記録集』の記述

3月13日（日）

山田町、宮古市　人命救助活動（350名救助）、（第9特科連隊）道路啓開　野田村、普代村、宮古市、山田町

第2師団（北海道旭川駐屯地）などから陸上自衛官約3千700名が小樽港及び苫小牧港から秋田港を経て岩手県の被災地へ急行。到着するや災害派遣活動を開始。

第2師団司令部（旭川駐屯地）岩手駐屯地及び宮古市にて活動、

第3普通科連隊（名寄駐屯地）宮古市田老、山田町にて活動（3月15日～）、

第25普通科連隊（遠軽駐屯地）宮古市南部一帯において活動（3月15日～）

第26普通科連隊（留萌、旭川駐屯地）久慈市、野田村、普代村及び宮古市田老において活動（3月15日～）

第2戦車連隊（上富良野駐屯地）宮古市田老、岩泉町にて活動

第2後方支援連隊（旭川駐屯地）宮古市田老及び山田町、野田村において生活支援、医療支援

第2施設大隊（旭川駐屯地）岩手県沿岸全域において活動

第2通信大隊（旭川駐屯地）岩手駐屯地を拠点とし活動全地域を通信支援

第2飛行隊（旭川駐屯地）岩手駐屯地を拠点とし岩手県全地域で活動

第2偵察隊（旭川駐屯地）宮古市重茂半島、岩泉町、田野畑村（岩手県北部地域）において活動、第11旅団（真駒内駐屯地）宮古市及び山田町において生活支援第2師団に配属

北部方面通信群（札幌駐屯地）岩手駐屯地を拠点に活動全地域を通信支援

3月17日（木）

宮古市～洋野町　人命救助活動、道路啓開、炊き出し支援、給水、物資輸送（第2師団）

3月19日（土）

支援物資輸送　花巻空港に米軍、空自の航空機より輸送し、かつ釜石港に入港した海自艦艇「ちくま」から陸自車両を持って灯油ドラム缶80本等を宮古市その他に輸送

給食、給水（継続中）、診療支援　山田町南小学校、釜石高校、ケアプラザ大槌及び宮古市重茂地区において計160名の患者を診療

3月21日（月）

入浴支援（継続中）宮古市津軽石小学校その他（第11後方支援連隊）、

診療支援　宮古市老木公園（第2師団）を医療支援の拠点として、診療支援を実施

質問４「援助内容（滞在中の援助内容の変化も含めて）」

答　「災害派遣で最も重要なことは、人命救助である。津波被害においては、生きている方は自力で山に登ることができる。希に、沈まなかった家屋や社内において溺死や圧迫死を逃れて挟まれて動けない方を救助することが人命救助の焦点となる。応急復旧段階においては、瓦礫の下に埋もれているご遺体の収容を如何に早急に実施できるかが焦点であると思慮する。」

「北部方面隊ＨＰ」より

「活動状況

北部方面隊が担任する被災地域は、がれきが逐次集積・運搬されるとともに海岸沿いの道路も徐々に通行可能となって来てはいるものの、復旧には未だほど遠い状況である。各部隊、隊員は引き続き被災者の立場に立ったきめの細かい活動を実施。この間、第５旅団が３月21日から石巻地域における救援活動を第６師団から引き継ぐとともに、第１特科団が22日から仙台・岩手における輸送支援等を、第１高射特科団が27日から第１戦車群、第１電子隊、方面対舟艇対戦車隊等の配属を受け石巻地域の多目的支援をそれぞれ開始した。

３月27日現在、避難民等空輸約４８０名、物資空輸約12トン、給食約16万食、入浴支援約１万２千名、処置患者約２千２００名の活動を実施した。

＊生活支援開始（第１特科団）
＊被災地への灯油給油（北部方面航空隊）
＊捜索救助活動（第１高射特科団）
＊道路啓開・がれきの除去（第７施設大隊）

行方不明者大規模集中捜索

北部方面隊から派遣された各部隊は、平成23年４月１日～３日の間、集中的に実施された大規模な行方不明者の捜索に参加した。捜索は、陸・海・空自衛隊及び米軍が参加し、被災地域を地上、海上・水（海）中及び空中から一斉に捜索した。

＊胸まで水に浸かりながらの懸命な捜索（第１高射特科団多目的支援隊：第１戦車群、方面対船艇対戦車隊）、行方不明者捜索（第２戦車連隊）
＊行方不明者捜索（第25普通科連隊、第２地対艦ミサイル連隊）

即応予備自衛官活動開始

平成23年４月３日から９日の間、北部方面隊から派遣した即応予備自衛官約１８０名が生活支援として救援物資の整理、輸送業務及び入浴支援を実施した。一方で、発災当初から派遣され生活支援等に従事していた第５音楽隊（帯広）が、避難所周辺のがれき除去作業を実施しつつ、４月２日北部方面隊として最初の慰問演奏を自治体の要求に応じて石巻市内の避難所で実施し、被災者等が抱える避難生活のストレス軽減に貢献した。

＊救援物資の仕分け作業をする即応予備自衛官
＊入浴支援施設の準備をする女性即応予備自衛官
＊救援物資を満載し被災地へ向かう車列（第２後方支援連隊輸送隊）、避難所における慰問演奏（第５音楽隊）

２度目の行方不明者大規模集中捜索

４月11日。発災から１か月が過ぎた。派遣された北部方面隊の各部隊は、多くの国民の期待に応えるべく、懸命な行方不明者捜索及び生活支援を継続実施。この間、自治体では逐次インフラを復旧し仮設住宅の建設等、被災者支援の充実を図っており、これに伴って自衛隊の支援に対する要請も変化した。

行方不明者は依然多く、北部方面隊の派遣部隊は、４月10日から12日の３日間に陸上・海上・航空自衛隊、米軍、海上保安庁、警察及び消防が実施した２度目の集中捜索に参加した。

派遣部隊は、現在担任している地域の捜索活動の進展に伴い、更に地域を気仙沼地区へと拡充して捜索活動を継続した。

行方不明者捜索・生活支援～被災者の気持ちになって～

未曾有の大地震により甚大な被害を被った被災地域も新学期を迎える時期となり、４月19日から学童・学生の登校が始まった。

隊員たちは、朝夕の通学時の学童・学生からの挨拶や元気な笑顔に励まされ、あらためて被災者の方々の気持ちになって、行方不明者捜索や生活支援に邁進していた。

北部方面隊の各派遣部隊では、各地域に区画を設けて、区画ごとに行方不明者捜索を実施するなど、丁寧かつ緻密な捜索を実施するとともに、４月25日及び26日に実施された第３回集中捜索にも全力をもって参加した。

３度目の行方不明者大規模集中捜索を敢行

東北地方のみならず、我が国全体に未曾有の大被害を及ぼした東北地方太平洋沖地震が発災して、早くも2か月が経過した。

この間、北部方面隊の派遣部隊は、４月25日及び26日に３回目の集中捜索が実施され、各部隊も参加した。

＊捜索活動　田老地区（第25普通科連隊）

＊がれき除去　岩手県宮古市（第25普通科連隊・第2施設大隊）

＊入浴施設への給水　岩手県宮古市（第11高射直接支援大隊）」

質問５「地元市町村、警察、消防署、消防団との協力体制と調整の方法」

答「地元との調整は、初期には消防署と実施した。次の段階で、市役所及び県の振興局と実施した。自衛隊は意思決定を伴う実行組織であり、指揮幕僚活動を通じて大規模な組織を動かすことのできる行動組織である。山本市長から支援の依頼を受けた際には、宮古市の災害対処計画を読ませて頂き、自衛隊が実施できる業務は、先ず自衛隊が引き受けて市役所の担当職員に申し送ることを実施した。市役所の機能が回復すると市の行政が動き出す。市の行政が動くと市は復興していくと信じて、山本市長に仕えました。」

質問６「立場上気をつけたこと、心配だったこと」

答「災害派遣の原則は、「要請」に基づく活動である。地元からの要請に基づき我々は行動しているという原則を隊員はもとより、市、消防の方々にも理解を頂いた。瓦礫の処理をどこから実施するかというニーズは、市、消防の方々に決めて頂くという原則を理解してもらった。我々はニーズに基づき、最良の部隊運用を決定して部隊を動かすことを部隊長にも言い聞かせた。」

質問７「隊員の心身のケアについて」

答「機材で瓦礫を掴むと、ガキガキといった音や手応えではなく、グニャッとした感触があった。ご遺体を発見したときの感触である。それを体験した隊員はその夜は眠れない。こうした話を聞いて、その後本格的に心のケアを考えた。メンタルヘルスサポートである。４人～６人一組で、テントの中で話し合いをさせた。自分が特異に思っていることが、誰もが経験していることと思えると安心する。当日起きたことを共有させる。現場で起こったことは現場で解決しなければならない。そうしないと、もう二度と現場には戻れなくなる。徹底して現場での解決と現場への再進出を追求した。成果もあり、第２師団では誰も精神的に駄目になった者は存在しなかった。メンタルヘルス教育は、師団に1名いる心理幹部を中心に教育を実施させて、メンタルヘルスを実施できる核となる隊員を逐次増やしていった。」

質問８「現場で気にかかったこと」

答「我々は北海道から派遣されていたことから、約３千７００名の部隊を支援する物資は全て北海道から直納により岩手駐屯地に運び込まれた。部隊及び隊員が活動するための衣食住の必需品はほぼ潤沢に手に入れることができた。一方で、活動に必要な最小限な物を除いて、それを被災地で使用することは極力避けなければならない。隊員は被災現場でボロボロになるまで活動している。夜は、被災者の目の届かないところで、メンタルヘルスケアーを含めてゆっくりと休ませてあ

げないと長期間に渡る支援は実施できない。現場での活動と後方での休息、現地ではできる限り痩せ我慢をさせて、後方ではできる限り本音を語らせてのんびりさせる。我々も人間であり、限界もあることを理解しないと大きな組織を束ねることはできないと痛感した。」

質問9　「東日本大震災の現場で考えたこと」

答　「被災者の方から、「自衛隊さん、ありがとうございます。」と頭を下げられるたびに心が痛んだ。我々は帰る家もあり、待っていてくれる家族も居る。長くても3か月活動すれば、北海道に帰り元の生活に戻れる。被災された方々は、半年、数年、いや一生、元の生活に戻れない方々である。今できることを最大限やりたい。最大限支援をしたい。焦る気持ちと励ましの言葉、本当に我々に声をかけて頂いた方々に対して、心より感謝を申し上げたい気持ちで一杯でありました。」

質問10　「将来に向けて」

答　「災害派遣の目的は、人命救助です。現在、中部方面総監部で勤務しておりますが、この地域における喫緊の課題は、「南海トラフ地震対処」であります。東日本大震災の5倍から10倍の被害が予想されていることを踏まえると、今回の東日本大震災において活動した派遣経験を活かして、もし災害が発生したならば、1人でも多くの人命を救える活動をできる組織を育成していかなければならないと、痛切に思い努力を続けてゆきたいと思います。」

「北部方面隊HP」より

「災害派遣部隊態勢移行～断固として貫く使命感　すべては被災者のために～

東日本大震災が発災して以来、自衛隊10万人態勢の中で、北部方面隊は約1万2千人の隊員を派遣して、『被災者のために』を合言葉に、黙々と、かつ愚直に、行方不明捜索、生活支援、さらには原子力災害対処任務に邁進してきたが、5月9日に示された『態勢移行に関する統合任務部隊行動命令』により、逐次、生活支援を主とする態勢に移行した。

引き続き生活支援にあたる隊員たちは、「態勢は移行するが、被災者の笑顔のために全力で支援することに何ら変わりはない。」と、高い使命感を堅持して任務に邁進した。

被災者の方々からも、「自衛隊さんに水やご飯をもらって、ありがたかった。」「自衛隊の風呂に入って生き返った。」「自衛隊さんの姿を見かけるとほっとする。」などの言葉を頂いており、支援に励む隊員たちの支えとなっている。

真心の生活支援を継続実施

東日本大震災に伴い災害派遣中であった各部隊は、5月9日に発令された第1次態勢移行命令及び6月1日に発令された第2次態勢移行命令により、逐次、原所属部隊に復帰した。

6月20日現在、約2千500名の隊員が現地での生活支援を継続実施。各駐屯地等に帰隊した派遣部隊・隊員は、明日にでも起こるかもしれない、次の「その日」に備えるべく、即応態勢を整えた。

＊防疫活動　岩手県宮古市（第11後方支援隊）」

東日本大震災　災害派遣部隊態勢移行

東日本大震災に伴う災害派遣で、最大約1万3千名を派遣していた北部方面隊は、態勢移行命令により惜しまれつつも現地を離れ新たなる態勢に移行した。

第2師団生活支援隊は7月7日に、第11旅団生活支援隊は7月12日に現地における活動を終了し、14日までに両隊ともそれぞれの駐屯地に帰隊した。

＊「ありがとう！」の言葉とともに見送られる派遣部隊　岩手県宮古市（第11旅団生活支援隊）

大規模震災災害派遣終結へ～任務完遂！復興を信じ、被災地を後に～

「平成23年（２０１１年）東北地方太平洋沖地震に対する大規模震災災害派遣の終結及び災害派遣の実施に関する自衛隊行動命令」により、３月11日の震災発災より約１２０日間にわたり続けられてきた、大規模震災災害派遣は終結した。

方面隊は、発災翌日の12日、整斉と小樽港から出発した第26普通科連隊（留萌駐屯地）を第一陣として、最大約１万３千名、延べ約83万人の隊員が現地における災害派遣活動にあたってきたが、石巻市において入浴支援任務にあたっていた第５後方支援隊（帯広駐屯地）基幹の23名が７月29日に、モニタリング等の任務にあたっていた第５旅団司令部付隊化学防護隊（帯広駐屯地）の32名が８月１日に、被災地を後にして北海道に向かったことにより、方面隊としての災害派遣部隊の任務を終了した。

災害派遣の間、「やるべきことをやる。」を全員が肝に銘じ、腰まで汚水に浸かりながらの行方不明者捜索や入浴支援等、体力の限界を超え、疲労しきった体を気力で奮い立たせ、任務に邁進する姿は、まさに災害派遣北方隊員の心得である、「被災者の立場になれ。」「東北方面総監のためにやれ。」「いかなる任務にもにっこり『了解』とのみ言え。」を行動で表していた。

活動実績（累計）

給水	**約６千６００ﾄﾝ**
給食	**約14万７千食**
入浴支援	**約23万４千人**
患者後送	**16人**
患者処置	**約５千人**
避難民等空輸	**約４８０人**
物資空輸	**約16ﾄﾝ**

⑶　自衛隊員の方々の手記

以下では『記録集』に収録された自衛隊員の体験記より宮古市に関連する内容を抄訳して掲載したい。

①　隊災害派遣活動に従事して感じたこと

第９後方支援連隊　戦車直接支援隊　３等陸曹　南館泰斗

「私は、このたびの東日本大震災に伴う災害派遣活動を通じ、主として戦車直接支援隊装輪車整備陸曹として、のべ50日ほど大槌地区において活動した。人員捜索、民生支援、物資輸送・整備支援など、多様な活動に従事し被災地の復興に協力できた。

私は岩手県宮古市が出生地であり、震災当初は連絡もとれず安否も不明である中、派遣活動に従事した。

今回の震災において、自衛隊の活動は各地域に多大な貢献をしたと感じている。それは、被害者一人一人に対して些細な事項にも対応し、それぞれの地域の人々のことを思い、故郷のためを思い復興に尽力したからであると思う。しかし、それらは自衛官の使命であり、当然のことであると私は思っている。

今回の活動により全国の方々や被災地域の方々が作成してくれた手紙や横断幕などの激励や感謝の気持ちは大変うれしく、励みにもなり、ときには目頭の熱くなるものであった。私は自衛官であることを誇りに思い、今後の自衛隊生活を邁進してゆく所存である。」

②　災害派遣を体験して

第３８７施設中隊　３等陸曹　今野雄也

「地震発生から16時間後、我が隊３８７施設中隊は、重機材等を積載し田老町へと災害派遣のため出発しました。田老町へ近づくにつれ、津波等による想像以上の被害状況に思わず目を覆いたくなりました。そのような状況下で、私たちに与えられた任務はライフラインの復旧作業でした。我々は油圧ショベルやドーザ等の重機材を使用し、道路上のがれきや倒壊家屋の除去により道路啓開作業を行いました。

作業中、現場からは御遺体などが発見され、がれきの下などには、

写真２　2014 年３月 11 日　田老防潮堤にて慰霊の祈りを捧げる自衛隊員

まだ生存者がいるのではないか、重機材で踏みつぶしたりしないかなどの不安が正直ありました。２次災害の防止及び被災者のことを第一に考えて作業を実施し、１件の事故もなく無事に終えることができました。

約３か月間、災害派遣に参加して現地の方々の生きていくための力強さ、精神力の強さを強く感じました。日本人の「絆」は世界一だと思いました。これからも地域復興のために皆で力を合わせて頑張っていきましょう。」

おわりに

こうした自衛隊の活動に対して、宮古市長の山本正徳氏は「不屈の使命感、不断の努力に敬意を表す」として以下のような感謝の言葉を述べている。

「特に発災から毎朝５時30分と午後６時30分からの１日２回の援助・救援対策会議を経て、昼夜を問わず極限の世界に飛び出す隊員の方々には、頭が下がる思いでした。

過酷な状況下での勇敢な活動とこれまでの御労苦に改めて感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。」（以上は『記録集』より抄訳）

震災当時の宮古消防署長だった小林一彦さんは「忘れられないこととして、自衛隊の幕僚長と毎晩夢物語を語り合ったことだ。困難を乗り越えることなどを語り合い、癒やされたのかもしれない」と語っておられた。

【引用文献】
平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）
『ありがとう　自衛隊　勇士たち　陸上自衛隊岩手駐屯地　東日本大震災「災害派遣」記録集（保存版）』盛岡タイムス　２０１１年

【引用ＨＰ】
「自衛隊北部方面隊ＨＰ　東日本大震災　災害派遣活動状況　北部方面隊―すべては被災者のために―」

5　海上保安庁

假屋雄一郎

はじめに

国土交通省の外局である海上保安庁は、日本の海域を11の管区に分け、東北地方の太平洋沿岸は宮城県塩釜の第二管区海上保安本部が管轄している。その下に釜石海上保安部が設置され、北は野田湾から南は広田湾に至る岩手県沖合を担任している。このうち、山田湾北部以北の距離約10海里までの海域が、宮古海上保安署の警備関係指定水域である。東日本大震災当時は、藤原埠頭の宮古港湾合同庁舎に宮古海上保安署が入っていた。釜石海上保安部の業務は、海上の治安維持、海難救助、海上交通安全の確保、海洋環境の保全、海上災害対策、航路標識の保守管理など多岐にわたっている（釜石海上保安部ホームページ）。

地震発生直後は、日本列島沿岸のほぼ全域に津波警報や津波注意報が発表されたため、全管区で巡視船艇３５２隻、航空機46機を発動して警戒にあたった。また、全国から大型巡視船を含む巡視船艇54隻と航空機19機を東北地方太平洋側に集結させ、捜索救助や急患輸送、火災消火、行方不明者の捜索などに従事した（海上保安庁　２０１２年）。

宮古港では、地震発生から9分後に宮古海上保安署の巡視艇「はつかぜ」が緊急出港し、宮古湾内の漁船に避難指示および誘導し、津波後も行方不明者の捜索に従事した。宮古海上保安署のある宮古港湾合同庁舎は2階まで浸水し、職員は屋上に避難した。その後、ライフラインも復旧せず基地機能不全に落ち入りながらも庁舎に泊まり込んで業務を続けた。

⑴　宮古湾における海上保安庁の主な対応

3月11日　みやこ海上保安署の巡視船「はつかぜ」が緊急出港し、宮古湾内の船舶に避難指示・誘導し、3日間洋上で行方不明者の捜索などに従事。

3月14日　巡視船の現場派遣にあわせ、神奈川県から岩手県へ食料等の救援物資（７８０㌔）を搬送。釜石、宮古へ救援物資（毛布１００枚等）を搬送。

3月15日　宮古、釜石、仙台塩釜港（仙台区）において、測量船３隻による港内の水路測量等を実施。

3月16日　八戸、宮古、仙台塩釜港（仙台区）において、測量船４隻による港内水路測量等を実施。

3月17日　宮古港一部供用開始。

4月4日　八戸漁港、蛸の浜漁港、気仙沼漁港、石巻漁港において、漁網等航路障害物の調査及び関係機関に情報提供を実施。

4月15～16日　宮古港において測量船「昭洋」により障害物調査を実施。

4月18日　宮古海上保安署を鍬ヶ崎の盛岡気象台特別地域気象観測所（旧宮古測候所）内へ仮庁舎として移転。

6月17～21日　宮古湾において海上保安庁航空機による海底地形測量を実施（国土交通省河川局との連携）。

9月5日～17日　宮古港において測量船「天洋」による港内水路測量を実施。

11月9～11日　釜石市・宮古市沿岸部において、岩手県警察と連携し行方不明者の合同一斉捜索を実施。

（海上保安庁ホームページ、東日本大震災への対応、広報文２０１１より作成）

⑵　宮古海上保安署職員の方々の手記

津波襲来時の宮古港（藤原埠頭）の状況及び宮古湾内での船舶の避難誘導などについて、財団法人海上保安協会編著『東日本大震災そのとき海上保安官は』（２０１２年　誠山堂書店）に掲載された職員の手記によって見てみたい。なお、当方で補足を加えるなど修正を施しており、文責は筆者にある。

① 心の準備はできていた

海上保安署巡視艇「はつかぜ」船長　鈴木伴典

大震災発生時、私は官用車を路肩に止めたものの尋常ではない揺れ方から「すぐに津波が来る」と確信、宮古保安署に向かった。3階の保安署まで駆け上がって「船を出す」と告げ、船に向かった。

船は、神山章敏機関長が、エンジンをかけ出港準備を整えていた。周辺の海面にはすでに緩やかな渦が生じていたものの、出港は可能と判断した。出港時の乗組員は、神山機関長とS航海士補、それと私とともに外回りに出ていたO機関士補だった。

緊急出港から3日間、通信手段も燃料、糧食なども乏しい中、本船は洋上で過ごすことになった。途中、他管区から救援に駆けつけた巡視船から水、おにぎりを分けてもらった。私はボロボロと涙を流した。この時、救助される側の気持ちがわかった。

船を出すか出さないかについては、さまざまな意見があるが、今回は最終的に私の判断で船を出し結果としてことなきを得た。しかし次も同じ行動をとり、うまくいくとは思っていない。ただ、津波が予想される場合、船の乗組員は本能的に船に集まろうとするので、「命てんでんこ」を教訓としている。

私は、約50年前のチリ地震津波の年代に生まれ、一昨年のチリ地震津波では、塩釜港口で悪戦苦闘の末、遊漁船などの救助作業を行っている。あれから、また津波と戦う日がくるとは思つてもいなかった。ただ、震災2日前の地震から動物的勘が働き、機関長には毎朝、船の暖機運転を指示するなど、心の準備はできていたようにも思う。

あの日から時はたっても、いろいろ考えさせられ、人間の無力さ、無能力さを痛感している。今は、次々送り込まれる若者たちに囲まれ、心にムチを入れ何とか立っている。

② 早く逃げろ、死にたいのか！

宮古保安署巡視艇「はつかぜ」機関長　神山章敏

大震災発生時には、宮古保安署で事務処理中だった。S航海士補と船に急ぎ、エンジンをスタンバイし、定係地の海面状況を監視していたところ、かなりのスピードで潮が引いていく。

「これは間違いなく津波が来る」と思った。

間もなく鈴木伴典船長とO機関士補が帰船し、急いで出港した。潮が引いて行くスピードはさらに増しており、あと少し遅ければ確実に着底して出港できない状況だった。

鈴木船長は、津波避難のためまっすぐ沖合に向かうことなく、閉伊川河口に着岸して、出港をためらっている漁船にマイクで避難を指示し、その後、サイレンを鳴らしつつ岩手県・宮古港に全速力で向かった。そこには大きな起重機台船がおり、多数の作業員が津波に備えて船固めしているところだった。船長のマイクを使っての避難指示は通常の広報の仕方ではなく、「大津波が来るぞ、早く逃げろ」というものであり、自分も船首甲板上に出てハンドマイクで「バカヤローッ早く逃げろ、死にたいのか！」

と2人で大声で怒鳴った。本船が全速で接近し大声で怒鳴り付けたことから、作業員も「これはいつもと違う、ただごとではない大事だ」と察知したのか、即座に警戒船や作業船に分乗して沖合に向けて全速力で避難した。

その後、本船も沖合に向け全速で航行を開始。鈴木船長の「もう出港してくる船はいないか」との指示で確認したところ、高浜方面から出港してくる4㌧～5㌧の漁船が1隻いた。私が「船長、高浜方面から漁船が1隻出てきている。戻ってください」と話すと、船長は躊躇することなく直ちに漁船へ向け本船を反転させた。

この時、船長は保安官としての純粋な気持ちだったのかもしれなかったが、自分が「戻ってください」と言ったのは正義感というより、正直なところ、宮古の漁民は必ず本船の行動を見ている――「取り締まりの時は偉そうにしているくせに、いざとなれば漁船を置き去りにして自分だけ逃げた」と、後で言われかねず、それは海上保安官として最大の屈辱であり、死んでもいやだという気持ちから全力を尽くそうと思ったからだ。

宮古港藤原防波堤灯台付近を航行中、津波の第1波が襲来し藤原埠頭入口は大きな渦が巻いていた。この渦を見たとき、「漁船も本船もこの渦に巻き込まれたら出られない」と思い、流されて渦に入らないことを祈りつつ、漁船と併走しながら沖合に向かった。

その後、第2波が襲来したためか藤原防波堤灯台が見る見るうちに水没、灯台に電力を供給する電線を乗り越えた津波がさながら花火のナイアガラのように流れ落ちた。その後、海面がさらに盛り上がったせいか視野にあった藤原埠頭の県営上屋(貨物を短期間留め置く倉庫)、保安署の建物が視界から消えてしまっていた。

幸い、本船と一緒に沖合に避難した漁船はすべて無事で、乗組員一同ほっとした。震災後の話になるが、本船に来て、

「あの時、『はつかぜ』さんに怒られたけど、お陰さんで船は助かった。ありがとう」

と言う人や、行方不明者捜索から帰港の際、宮古港出崎埠頭で本船に向かって手をふりつつ、何回もお辞儀する人がいた。

以前、釜石沖を航行中のフェリー内で産気づいた妊婦を深夜に緊急出港して搬送したことがあり、人命救助がいかに感謝され、すばらしい仕事であるのか、再認識させられた。

一方で、今回の震災が自分にもたらした惨事ストレスの影響が大きいことがらもある。官舎に帰り、1人で震災報道をテレビで見ていて、その地域の壊滅的な場面が映し出されるたびに、以前その場所で検挙した漁民が初動捜査を終え、帰ろうとする官用車のドアにしがみつき「今回だけどうか見逃してください」と頼む姿や、罰金が来る可能性が高いことを告げると「来月以降でなければ年金ももらえないので払えないな」などと漏らした漁民たちの顔が浮かんでくる。

誤ったことはしていないと頭では十分理解しているつもりだが、身体がついていかない。こんな大惨事になるなら、なぜあの時、一言「許してやる」と言えなかったのかと悔やみつつ、あの人たちが何とか無事でいてくれと願う毎日である。

宮古市内の家屋にペンキで「解体OK」と書かれた場所に、「海のバカ野郎、海なんか嫌いだ」と同じくペンキで書いた住人の気持ちは痛いほどわかる。

自分の古里は釜石市だが、幼い時から慣れ親しんだ町並みを、ほんの一瞬でズタズタにした海が本当に憎くて仕方ない。しかし同時に海が自分の職場であり、その恩恵を受けていることも事実である。

③ 津波の襲来を予感

宮古保安署

国内観測史上最大の巨大地震の横揺れが30秒以上続いたことから津波の襲来を予感。巡視艇「はつかぜ」は、地震から9分後には緊急出港し、陸上職員は庁舎（藤原埠頭の宮古港湾合同庁舎）3階の事務所で情報収集を開始した。海面を確認するが顕著な引き波は認められず、除々に海面が上昇して岸壁上が海水に浸った程度と思ったところ、対岸の建物が急に白波に飲み込まれ、直後に真っ黒な波の塊が事務所前面の防波堤を乗り越えて庁舎を襲来した。

大量の海水が一気に庁舎2階まで浸入し、行き場のなくなった空気が甲高い声を上げながら庁舎全体に鳴り響く。屋上へ避難して周囲を見渡したところ、津波が防潮堤を越えて市街地に達しており、一面が海と化していた。悲惨な状況を目の当たりにしたが、現実離れした光景のせいか恐怖心や絶望感といった感情は沸かず、津波の状況を確認しながら落ち着いて事務所内などの必需品を確保した。

海底が露出するほどの強い引き波と、岸壁上を超える強い押し波が一晩中繰り返し発生し、濁流の轟音が鳴り響き、風雪・氷点下・真っ暗闇の夜が明けると庁舎屋上から見た周囲の様子は一変していた。

防潮堤を越えた津波から猛ダッシュで逃げ延びた職員も含め、ライフラインが断たれた事務所で1か月以上寝泊まりして業務を行っていた。

また津波は引き波があり、白波を立てて襲来する感覚だったが、宮古を襲った津波は押し波から始まり、うねりのような波の塊により急激に水位が上昇するもので、「想定外」の津波だったといえる。

その後、幼い子どもを連れながら行方不明になった家族を探している女性の姿が見られた。女性は毎日漁港を訪れていた。遺族の気持ちが落ち着くことは簡単なことではないが、海に流された行方不明者を1人でも多く発見して遺族の元へ帰すこと、または、遺族が納得するような捜索を行うことが求められていることを改めて感じた。

【参考文献】

「平成23年（2011年）東北太平洋沖地震への対応等について」海上保安庁（海上保安庁ホームページより）
「東日本大震災への対応の記録」2012年1月　海上保安庁（海上保安庁ホームページより）
㈶海上保安協会編著「東日本大震災そのとき海上保安官は」2012年3月　誠山堂書店
海上保安庁「海上保安レポート2012」2012年5月　日経印刷株式会社